

## 和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第26~27章）

外 藺 幸 一

### まえがき

本稿は前号（鹿児島国際大学『国際文化学部論集』第21巻4号）に掲載した和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）（第24~25章）」に引き続くものである。「第19巻1号」（本シリーズ冒頭の号）所載の和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）（第1~3章）」の「まえがき」に記載したように、筆者は、すでにラリタヴィスタラ全27章の初訳を一応完了しているのであるが、もう少し読み易い和訳にすることを目標に「改訂版」を作成することにした。そして、これまでに第1章から第25章までを発表したので、今回はそれに続く形で、本シリーズの最終となる第26章と第27章を掲載する。なお、第22~27章は、拙著『ラリタヴィスタラの研究 下巻』の「第三部」に掲載したので、これらの章は『下巻』を底本とする。

### 略号

方広 = 『方廣大莊嚴經』（大正新脩大藏經 187）. Chinese Translation of the Lalitavistara.  
 普曜 = 『普曜經』（大正新脩大藏經 186）. A Chinese Translation of the (old) Lalitavistara.  
 『佛教大辞典』 = 『望月 佛教大辞典（増訂版）』（昭和32年増訂版，世界聖典刊行協会）  
 『梵和大辞典』 = 荻原雲来編『漢訳対照 梵和大辞典』（昭和53年，講談社）  
 『佛教語大辞典』 = 中村元『佛教語大辞典』（昭和56年，東京書籍）  
 『上巻』 = 外藺幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』（平成6年，大東出版社）  
 『中巻』 = 外藺幸一『ラリタヴィスタラの研究 中巻』（2019年2月，大東出版社）  
 『下巻』 = 外藺幸一『ラリタヴィスタラの研究 下巻』（2019年10月，大東出版社）  
 BHSG = *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary* Vol. I : Grammar, by F. Edgerton, New Haven, 1953.  
 BHSD = Ditto, Vol. II : Dictionary.

### 括弧符号の使い分け

和訳の文章中において用いる括弧は、原則として、次のように区別する。

1. 「 」は、会話文を示すために用いる。
  2. ( ) は、直前の言葉を、別の言葉で言い換えるために用いる。
  3. [ ] は、訳文を補充して、意味をはっきりさせるために用いる。
  4. < > は、特殊な複合語や、重要な熟語を示すために用いる。
  5. 《 》 は、東大主要写本に原文が欠落しているが、挿入すべきである部分の訳文に用いる。
  6. { } は、東大主要写本に原文が挿入されているが、削除すべきである部分の訳文に用いる。
  7. 【 】 は、諸写本に混乱があり、削除すべきか挿入すべきか確定しがたい部分の訳文に用いる。
- \*なお、第22章から第27章までの訳文の左端に付してある数字（208~484）は、『下巻』第二部（本文校訂）における梵語原文のページ数を示すものである。

キーワード：ラリタヴィスタラ、仏伝文学、大乘仏教、混淆梵語、仏教思想

## 『ラリタヴィスタラ』(大遊戯経)

### 第26章(転法輪品)<sup>1</sup>

378 その時、実に比丘らよ、如来は目的を成就し、要務を達成し、一切の束縛を断截し、一切の煩惱を拔除し、汚穢と煩惱を醇化し、マーラ(悪魔)なる怨敵を摧伏し、一切の仏法の理に悟入し、一切を知り、一切を見通し、十力を具足し、四無畏を獲得し、十八不共仏法を成満し、五眼を具足し、障礙なき仏眼を以て一切世間を觀察して、かくの如く思念せり。「われは、まず最初に、誰に法を説くべきか。清浄にして善良なる性質の、教化し易く、理解させ易く、よく浄化され、貪欲・瞋恚・愚癡が微弱にして、知識を隠匿することなく、法を聴かざれば減退するであろう者にして、われが最初に法を説くべきところの、また、われの<sup>2</sup>説法をよく理解し、われを惱乱せしめざるところの衆生は誰か」[と<sup>3</sup>]。

その時、実に比丘らよ、如来はかくの如く思念せり。「ウドラカ・ラーマプトラ<sup>4</sup>は、まさしく清浄にして、性質は善良なりて、理解させ易く、よく純化され、貪欲・瞋恚・愚癡が微弱にして、知識を隠匿することなく、法を聴かざれば減退する者なりて、彼は門弟たちに非想非非想処の戒行に相応する法を説示せり。彼は、今、どこに住するや」と[思念して]、「[彼は<sup>5</sup>]命終して、今日で七日を過ぎたり」と了知せり。天神たちもまた、如来の両足に平伏して、かくの如く言えり。「世尊よ、それ、その如くなり。善逝よ、それ、その如くなり。ウドラカ・ラーマプトラは命終して、  
380 今日で七日を過ぎたり」[と]。比丘らよ、その時、われはかくの如く思念せり。「あわれなるかな。かくの如く卓越せる、この法を聴かずして命終せるとは、ウドラカ・ラーマプトラの大なる損失なり。実に、彼が若しこの法を聴聞したならば了解したるものを。また、われが最初に彼に説法せんとも、彼はわれを惱乱せしめざりしものを」[と]。

比丘らよ、如来はまた、かくの如く思念せり。「清浄にして、教化し易く、というところから、前述の如くにして、乃至、われの説法を惱乱せしめざるところの、誰か他の衆生ありや」と。それから、比丘らよ、如来にかくの如き思念が生じたり。「実に、かの<sup>6</sup>アーラーダ・カーラーマ<sup>7</sup>もまた、清浄にして、というところから、乃至、われの説法を惱乱せしめざるべし」と憶念したり。比丘らよ、如来は、<sup>8</sup>「彼は、今、いずこにありや」と憶念して、「命終して、今日で三日を過ぎたり」と了知せり。浄居天の天神たちもまた、その事を如来に告げたり。「世尊よ、それ、その如くなり。善逝よ、それ、その如くなり。アーラーダ・カーラーマは命終して、今日で三日を過ぎたり」[と]。その時、如来にかくの如き思念が生じたり。「あわれなるかな。かくの如く卓越せる、この法を聴かずして命終せるとは、アーラーダ・カーラーマの大なる損失なり」[と]。

<sup>1</sup> 方広にも「轉法輪品」と訳されている。

<sup>2</sup> 「われの」(me) はチベット訳には「この」(hdi) と訳されており、梵文と合わない。

<sup>3</sup> チベット訳には「〜と」に相当する訳語 (sñam mo) がある。

<sup>4</sup> この人名は写本でも校訂本でも rudraka rāmaputra とされているが、『中巻』第17章(533頁:註1)に記載したように、rudraka は udraka の誤りと思われるので、udraka rāmaputra と校訂する。方広には「外道羅摩之子」と訳されている。

<sup>5</sup> チベット訳には「彼は」に相当する訳語 (de) がある。

<sup>6</sup> チベット訳には「かの」(ayam) に当たる訳語はない。

<sup>7</sup> この人名の原語は āraḍa kālāma である。方広には「阿羅邏仙人」と訳されている。

<sup>8</sup> チベット訳には「比丘らよ、如来は」(bhikṣavas tathāgataḥ) に相当する訳語がない。

それからまた、比丘らよ、如来にかくの如き思念が生じたり。「一体、誰か、清浄にして、善良なる性質の、というところから、乃至、われの説法を悩乱せしめざるところの、他の衆生ありや」と。

382 その時、実に比丘らよ、如来にかくの如き思念が生じたり。「実に、かの<sup>こくけんじゆ</sup>五群賢者<sup>ごぐんけんじやう</sup>は清浄にして、性質善良なりて、理解させ易く、非常によく純化され、貪欲・瞋恚・愚癡は微弱にして、知識を隠匿することなく、彼らは、法を聴かざれば減退すべし。また、彼らは、われが苦行を修習せる時に、[われに]親しく仕えたり。彼らは、わが説法を理解すべし。また、われを悩乱せしめることなからん」[と]。

それから、実に比丘らよ、如来にかくの如き思念が生じたり。「されば、われは五群賢者たちに、最初に法を説くべし」[と]。

その時、実に比丘らよ、如来はまた、かくの如く思念せり。「五群賢者は、今、どこに住するや」[と]。それから、如来は、<sup>ぶつげん</sup>仏眼を以て一切の世間を觀察しつつ、眺めたり。[そして]五群賢者がヴァーラーナシーの<sup>せんにんだしよろくやわん</sup>仙人墮處鹿野苑に住するを見たり。また[それを]見て、如来はかくの如く思念せり。「われは五群賢者に、まず最初に、法を説くべし。彼らは、われの、まず最初の説法を理解するであろう」[と]。それは何ゆえか。比丘らよ、彼らは、よく実修し、<sup>びやくじゆう</sup>白浄なる諸法をよく積聚し、<sup>げだつ</sup>解脱の道に向かい、<sup>しやうがい</sup>障碍を滅除したればなり。

384 それから、実に比丘らよ、如来はかくの如く思念したるのち、菩提道場より起ち上がり、三千大千世界を震動させてから<sup>10</sup>、次第にマガダ[国]を遊行しつつ、カーシ国へと歩を進めたり。その時、ガヤー[山<sup>11</sup>]と菩提道場との間において、一人のアージーヴァカ<sup>12</sup>（邪命派の修行者）が、はるか<sup>13</sup>遠方より近づき来たる如来を見たり。また、[それを]見て、如来のほうへと近づき来たりて、一方に立てり。また比丘らよ、一方に立って、[その<sup>14</sup>]アージーヴァカは、如来と共に[互いに]種々なる挨拶の言葉を交わしたるのち、かくの如く言えり。「長老ガウタマよ、<sup>あな</sup>貴方の諸感官は甚だ清浄なり。また、貴方の皮膚の色は、極めて清浄かつ甚だ純粋なりて、<sup>こがね</sup>黄金の輝きあり。あたかも、秋の<sup>なつめ</sup>棗の色が<sup>こうはく</sup>黄白に煌き、<sup>きらめ</sup>明浄にして、黄金の輝きのあるが如く、まさにその如く、<sup>おんみ</sup>御身ガウタマの諸感官は極めて清浄なりて、顔の相貌は極めて清浄かつ甚だ純美なり。あたかも、ターラ樹の果実が熟して、茎より<sup>も</sup>挽ぎとられたる直後の、柄茎の枝が<sup>15</sup>黄金の煌きを有し、極めて清浄かつ甚だ純美なるが如く、まさにその如く、御身ガウタマの諸感官は極めて清浄なりて、顔の相貌は極めて清浄かつ甚だ純美なり。あたかも、ジャンブー河産の金（<sup>えんぶつごん</sup>閻浮檀金）<sup>16</sup>の首飾りが炉から引き出さ

<sup>9</sup> 「五群賢者」については第20巻第4号所載の拙訳（註102）を参照されたい。

<sup>10</sup> チベット訳 [gśegs nas]（～に赴いてから）は梵文 samprakampya（～を震動させてから）と合わない。方広には「振動三千大千世界」と訳されている。チベット訳は原文を prakramya と読んだものか。

<sup>11</sup> チベット訳には「山」に相当する訳語 (ri) がある。方広には「伽耶城傍有一外道」と訳されている。

<sup>12</sup> ajivaka（または ajivika）は「阿耆維」と音訳されることがあるが、ここでの方広の訳は「阿字婆」である。アージーヴァカは「正当な修行以外のよこしまな手段で生活する出家者」（邪命外道）の代表格であるため、「邪命外道」と呼ばれることが多い。

<sup>13</sup> チベット訳には「はるか」(eva) に当たる訳語はない。

<sup>14</sup> チベット訳には「その」に相当する訳語 (de) がある。

<sup>15</sup> 「柄茎の枝が」の部分チベット訳には rtsa ba logs（茎の側か？）と訳されている。「柄茎」とは「果実を支えていた軸茎」の意である。

<sup>16</sup> 「閻浮檀金」(jāmbūnada-suvarṇa) とは「閻浮樹の大森林を流れる河の底に産する砂金。その黄金は赤黄色で紫色を帯びている。金のうち最も高貴なものとした」(『佛敎語大辞典』121頁参照)。

れ、熟練した若い鍛冶工によって美しく加工されて、赤黄色の毛氈の上に置かれるや、色あざやかになり、極めて清浄かつ甚だ純美なりて、黄金の煌きを有し、非常に<sup>17</sup>明浄なるが如く、まさにその如く、御身ガウタマの諸感官は甚だ清澄なりて、皮膚の色は極めて清浄にして、顔の相貌は甚だ純美なり。長老<sup>18</sup>ガウタマよ、[御身は] いずこにて梵行期を過ごしたるや<sup>19</sup> [と]。比丘らよ、かくの如く言われて、如来は、かのアーjeeヴァカに、偈を以て答えたり。

1. われには、実に如何なる師もなく、われに同等なる者は存在せず。

われは、独り<sup>ひと</sup>で正覚を得て、清涼なる無漏者と成れり。

386 彼(アーjeeヴァカ)は言えり。「ガウタマよ、よもや自ら[自分は]阿羅漢なりと言明するに  
はあらざるや<sup>20</sup> [と]。如来は告げたり。

2. われは世間における真の阿羅漢にして、実に、われは無上の教師なり。

天神・阿修羅・乾闥婆を含めても、われに匹敵する人物は存在せず。

彼は言えり。「ガウタマよ、よもや自ら勝者(仏陀)なりと言明するにはあらざるや<sup>21</sup> [と]。如来は告げたり。

3. 漏(煩惱)を滅尽するに至れる、われの如き者こそ、勝者なりと知るべし。

諸悪法は、われにより征圧せられたり。それ故に、ウパガ<sup>22</sup>よ、われはまことに勝者なり。

彼は言えり。「長老ガウタマよ、今、どこに行かんとするや<sup>23</sup> [と]。如来は告げたり。

4. われはヴァーラーナシーに行くべし。必ずやカーシ族<sup>24</sup>の都城に行きて、  
盲目たるが如き世間に、比類なき光明を灯すべし。

5. われはヴァーラーナシーに行くべし。必ずやカーシ族の都城に行きて、  
耳聾たるが如き世間に、甘露(不死)の太鼓を打ち鳴らさん。

6. われはヴァーラーナシーに行くべし。必ずやカーシ族の都城に行きて、  
世間において転ぜられたることなき法輪を転ずべし。

「ガウタマよ、そのようになされたし<sup>25</sup>」と言って、かのアーjeeヴァカは南方に向かって去り行けり。如来もまた、北方に向かって進み行けり。

かくして、実に比丘らよ、如来は、その時、眉間の[白]毫相より光線を発したり。その光線に

<sup>17</sup> チベット訳には「非常に」(ativa)に当たる訳語はない。

<sup>18</sup> この箇所「長老」(āyusman)は、方広には「仁者」と訳されている。

<sup>19</sup> 「いずこにて梵行期を過ごしたるや」は、チベット訳では「誰より梵行を修習したるや」という意味の訳文になっている。

<sup>20</sup> チベット訳は「ガウタマよ、自ら阿羅漢なりと言明するや」という意味の訳文になっており、方広には「瞿曇。汝自謂是阿羅漢耶(汝は自ら是れ阿羅漢と謂うや)」と訳されている。

<sup>21</sup> チベット訳は「ガウタマよ、自ら勝者なりと言明するや」という意味の訳文になっており、方広には「瞿曇。汝自謂爲佛耶(汝は自ら佛と爲れりと謂うや)」と訳されている。

<sup>22</sup> この邪命外道の名は通常 upaka と呼ばれるが、ここでは全写本において upaga とされている。

<sup>23</sup> 方広には「汝於今者爲何所往(汝今に於ては何の所に行くかと爲すや)」と訳されている。

<sup>24</sup> kāśi(=kāśī)は「迦尸」と音訳される。「迦尸国」は古代中印度の十六大国の一つであり、その都城はヴァーラーナシー(ペナレス)であったとされるので、『下巻』には「カーシ[国]」と訳したが、原文(kāśinām)は複数形(gen. pl.)であるから民族の名と見なし、「カーシ族」に訂正する。『佛教大辞典』423頁「迦尸国」参照。

<sup>25</sup> チベット訳では「そのようになされたし」が繰り返されている。

よって、この三千大千世界は、広大なる金色の<sup>26</sup>光明に満たされたり。

それから、実に比丘らよ、如来は、ガヤーにおいてスダルシャナ<sup>27</sup>竜王に招待せられ、宿舍と食  
388 事の供養を受けたり。それから、如来はローヒタヴァストウ<sup>28</sup>に行き、《それから<sup>29</sup>》ウルヴィル  
ヴァーカルパ<sup>30</sup>に、それからアナラ<sup>31</sup>に、それからサーラティプラ<sup>32</sup>に行き、また、それら【全  
て<sup>33</sup>】の地において、比丘らよ、如来は長老たちに招待され、食事と宿舍の供養を受けながら、次  
第に、ガンジス河<sup>34</sup>の岸に達したり。

その時、実にまた、比丘らよ、大河ガンジスは非常に満水し、岸の縁際<sup>ふちぎわ</sup>まで寄せて流れたり。

そこで、実に比丘らよ、如来は、向う岸へ渡るために（渡河を頼むために）船頭<sup>せんとう</sup>に近づけり。彼  
（船頭）は言えり。「ガウタマよ、渡船賃<sup>とせんちん</sup>を払われたし」[と]。「友よ、われに渡船賃なし」と告げて、  
如来は空中を飛んで、こちらの岸から向こうの岸へと渡りたり。すると、かの船頭はそれを見て、  
「[この<sup>35</sup>] かくの如き類の応供者（供養すべき者）を、われは渡さざりしとは」と、激しく後悔し、  
「さても無念なり」と言い、悶絶して地に倒れたり。それから船頭は、この出来事をビンピサーラ  
王<sup>びんぴさう</sup>に奏上せり。「主よ、沙門ガウタマは渡船賃を求められたるも、[われに] 渡船賃なしと告げて、  
空中を飛んで、こちらの岸より向こうの岸へと渡りたり」と。それを聞いてビンピサーラ王は、そ  
れ以来、全ての出家者に渡船賃を免除したり。

かくして、実に比丘らよ、如来は次第に聚落<sup>じゅうらく</sup><sup>37</sup>を遊歴しつつ、ヴァーラーナシーの《大》都城に  
近づき来たりて、未だ早朝時に、內衣<sup>ないえ</sup>を着け、上衣<sup>じょうえ</sup>と鉢<sup>ぼつ</sup>とを執りて<sup>38</sup>、ヴァーラーナシーの大都城  
390 かに托鉢に入りたり。そこにおいて托鉢のために巡回し、午後の托鉢から帰りて、食事を済ませてか  
ら、仙人墮處の鹿野苑のあるところ、また五群賢者たちのいるところへと進み行けり。実にまた、  
五群賢者は、如来が遠方より来たるを見たり。また[それを]見て、約定<sup>やくじょう</sup>をなせり。「長老がたよ、  
放逸なる<sup>39</sup>大食いにして、勤行より退墮したる、あの沙門ガウタマが来たれり。実にまた、彼は、  
あの、かつての、あれほどの苦行によってすら、人間（世俗）の最上の法を超越せる、真に高貴な  
る知見の殊勝なる境地を、いささかも証得すること能わざりき。況して、今、有形<sup>40</sup>の食物を食し  
て、世俗的安樂の享受に専心して住すれば尚<sup>なほ</sup>のことなり。実に彼は、《放逸なる》大食いにして、  
能無<sup>のうな</sup>しなれば、誰も彼を歓迎すべきにあらず。立って迎えるべきにあらず。鉢と上衣とを受け取る

<sup>26</sup> チベット訳には「金色の」(suvarṇavarṇa) に当たる訳語はない。

<sup>27</sup> この竜王名の原語は sudarśana であり、方広には「善見」と訳されている。

<sup>28</sup> この地名の原語は rohitavastu であり、方広には「盧釐多婆蘇都村」と訳されている。

<sup>29</sup> この箇所「それから」(tasmād) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。なお、「下巻」にはこの挿入についての註記が欠けているので補足する。

<sup>30</sup> この地名の原語は uruvilvākālpa であるが、方広にはこれに該当する訳語が見当たらない。

<sup>31</sup> この地名の原語 anāla (または anāla) については、諸写本に混乱が見られ不明である。チベット訳 [tsan da la] によれば、candala と読むべきであるが、写本の支持がない。方広には「多羅聚落」と訳されている。

<sup>32</sup> この地名の原語は sārathipura であるが、方広には「婆羅村」と訳されている。Mv(III,pp.327-328) によれば、仏陀は cundadvila で邪命外道の upaka に遭ったあと、lohitavastuka → gandhapura → sārathipura と移動している。

<sup>33</sup> チベット訳には「全て」(sarveṣu) に当たる訳語はない。

<sup>34</sup> チベット訳は「大河ガンジス」という意味の訳文になっている。

<sup>35</sup> チベット訳には「この」に相当する訳語 (ḥdi) がある。

<sup>36</sup> この王名 bimbisāra は、方広には「頻婆娑羅」と音訳されている。

<sup>37</sup> 「聚落」とは「人が集まり住む村落」である。

<sup>38</sup> チベット訳は「內衣と上衣を身に着け、鉢を執りて」という意味の訳文になっている。

<sup>39</sup> チベット訳には「放逸なる」(saithilika) に当たる訳語はない。

<sup>40</sup> 「下巻」には「固形」と訳したが、「有形」に訂正する。第20巻第4号所載の拙訳（註348）参照。

べきにあらず。坐具も、飲用の<sup>41</sup>水も、足置き台も与えるべきにあらず。余分の座席を指定して<sup>42</sup>、長老ガウタマよ、これら余分の座席があるが故に、もし欲するならば坐すがよいと言うべし」と。しかし、長老アージュニヤータカウディンヤ<sup>43</sup>は、心中には同意せざりしも、言葉では反論せざりき。比丘らよ、如来が五群賢者のいるところに近づき来たるにつれて、次第に、彼らは各自の座に安坐できず、立ち上がりたくなれり。あたかも、翼のある鳥が籠の中にありて<sup>44</sup>、【しかも<sup>45</sup>】その籠の下から火に燻されるならば、その鳥は火に熱せられて、あわてて動きまわりたくなり、飛び上がりたくなるべし。まさにそのように、如来が五群賢者の近くに來たるにつれて、ますます、五群賢者たちは各自の座に安坐できず、立ち上がりたくなれり。《それは何ゆえか。<sup>46</sup>》如来を見て座より立ち上がらざるが如き、そのような衆生は、衆生界には一人も存在せざればなり。されば、如来が五群賢者たちに近づくとつれて、ますます五群賢者たちは、如来の威徳と威光に耐え得ずして、座より動き始め、また、みなが誓約を破って、座より立ち上がり、ある者は立って奉迎せり。ある者は立ち上がって鉢と上衣とを受け取れり。ある者は座を設けたり。ある者は足置き台を<sup>47</sup>、ある者は洗足用の水を用意したり。そして、かくの如く言えり。「長老ガウタマよ、貴方はようこそ来られたり。長老ガウタマよ、貴方はようこそ来られたり<sup>48</sup>。この設えられたる座に坐したまえ」[と]。実にまた、比丘らよ、如来が、まさに設えられたる座に坐すや、五群賢者たちは、如来と共に、丁重にして《懇切なる<sup>49</sup>》、様々の挨拶の言葉を交わしたるのち、一方に坐せり。また、一方に坐して、彼ら<sup>50</sup>五群賢者は、如来にかくの如く言えり。「長老ガウタマよ、貴方の諸感官は甚だ清澄なり。皮膚の色は極めて清浄なり、云々と、すべて前述の[アージーヴァカの讚辭の]如し。長老ガウタマよ、貴方には、何か、人間(世俗)の最上なる法を超越せる、真に高貴なる知見の殊勝なる境地が現證せられたるにあらずや」[と]。比丘らよ、かくの如く言われて、如来は五群賢者に、かくの如く告げたり。「比丘らよ、汝らは如来を長老との言葉で呼ぶことなかれ。[そのような呼び方で悪業を積むことによって]汝らに、長夜(長期間)にわたり、無益・非福・不樂を生ずることのなきように。比丘らよ、われは不死(甘露)と、不死に至る道とを現證したり。比丘らよ、われは仏陀(正覚者)なり。一切知者、一切見者にして、清涼たる境地(解脱)を得たる無漏者(煩惱なき者)にして、一切法に自在なり。比丘らよ、われは[汝らに<sup>51</sup>]法を説くが故に、來たれよ、聴かれよ、修学せよ、耳を傾けよ(傾聴せよ)。われは教示し、教戒せん。われによって、如実に、正しく教示せられ、正しく教戒せられて、汝らもまた、諸漏(諸々の煩惱)を滅して、無漏なる心解脱(と慧解脱と<sup>52</sup>)を、まさにこの世において、現證し<sup>53</sup>、通達して、我(自我意識)の生起が尽滅し、梵

<sup>41</sup> 「下巻」には「飲用可能な」と訳したが、「飲用の」に訂正する。

<sup>42</sup> 方広には「指卑座(卑座を指して)」と訳されている。

<sup>43</sup> この人名の原語は ājñātakauṇḍinya である。方広には「阿若憍陳如」と音訳されている。

<sup>44</sup> チベット訳は「翼のある鳥が網にかかり」という意味の訳文になっている。

<sup>45</sup> 「しかも」(ca) は東大主要写本には欠けているが、文脈上は挿入したほうが自然である。

<sup>46</sup> 「それは何ゆえか」(tat kasmāt) は全写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>47</sup> チベット訳は「足置き台を用意し」という意味の訳文になっている。

<sup>48</sup> チベット訳では「長老ガウタマよ、貴方はようこそ来られたり」の反復はなく、一回だけである。

<sup>49</sup> 「懇切なる」(saṃrañjanīm) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>50</sup> チベット訳には「彼ら」(te) に当たる訳語はない。

<sup>51</sup> チベット訳には「汝らに」に当たる訳語(khyed la)がある。

<sup>52</sup> 「慧解脱と」(prajñāvimuktiṃ ca) は全写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>53</sup> チベット訳には「現證し」の前に「自らの超越的智見によって」という意味の訳文が付加されている。

行に止住し、所作事<sup>54</sup>をなし終えて、『この世から他の世界へ再生することなし』と了知すべし。比丘らよ、汝らは、かくの如く思念したるにはあらずや。『長老がたよ、実に、かの沙門ガウタマが来たれり。放逸なる<sup>55</sup>大食いにして、勤行より退墮せる、云々と、すべて前述の如くにして、【乃至】もし欲するならば坐すがよい』[と]』。<sup>56</sup>また、「来たれ、比丘らよ」と言われて<sup>57</sup>、彼ら[にありしところ]の、あらゆる外道の特相と外道の標識との、それらの全てが、まさにその刹那に消滅したり。三衣（大依、上衣、內衣）と鉢とが出現し、また、髪も切除せられたり。それにより、あたかも受戒して百年を経たる比丘の威儀に等しきものとなれり。それがまさしく彼らの出家[の作法]にして、それこそが[彼らの]受戒となり、比丘の身分<sup>58</sup>を具えたり<sup>58</sup>。

396 また、実に比丘らよ、その時、五群賢者なる比丘たちは<sup>59</sup>、如来の足元に平伏して、過誤を告白したり。また、如来に対して師であるとの想念と、愛念と淨信と尊重心を起こしたり。尊重心を生じて、また、多種多様な蓮池で、如来への洗浴と淨飾との奉事をなせり。また、比丘らよ、如来は洗浴より上がって、かくの如く思念せり。「往昔の如来、阿羅漢<sup>60</sup>、正等覺者たちは、一体、どこに坐して法輪を転じたるや」[と]。すると、比丘らよ、往昔の如来、阿羅漢<sup>61</sup>たちが法輪を転じたるところの地処、まさにその地処に、七宝<sup>62</sup>より成る、千の座が出現したり。

その時、如来は、往昔の如来[阿羅漢<sup>63</sup>]たちに敬意を表して、三つの座を右遷したるのち、獅子の如く、畏れることなく（堂々と）第四の座<sup>64</sup>に結跏趺坐して坐したまえり。五群賢者もまた、如来の足元に頭面をつけて敬礼したるのち、如来の面前に坐せり。

また、実に比丘らよ、その時、《如来は<sup>65</sup>》身体より、かくの如き光明を發したり。すなわち、その光明によって、この三千大千世界は宏遠なる光に満たされたり。また、その光明によって、かの世界中間の處、[すなわち]悲惨にして悲惨に満ち、暗黒にして暗黒に覆われ、そこにては、これらの月と太陽とは、かくの如く大神力あり、かくの如く威力あり<sup>66</sup>、かくの如く大勢力あるも、[そ

<sup>54</sup> 「所作事」(karaniya) とは「自分の為すべき重要な務め；要務；任務」の意である。

<sup>55</sup> チベット訳には「放逸なる」(saithilika) に当たる訳語はない。

<sup>56</sup> この部分は前後の脈絡が途絶えており、文意不明である。方広には原文にはない補足部分が見られるので、梵語原文に欠落があると思われる。チベット訳は少しだけ修正する形で対応しているが、文意は曖昧なままなので、この原文欠落はチベット訳以前に発生していたものであろう。方広の当該部分の漢訳は「汝昔嫌我俱作。長老瞿曇耽著世樂不堅持戒欲斷煩惱便即退墮。我適近汝各自不安。是故當知不得稱呼如来爲長老也。五跋陀羅俱白佛言。世尊我今願得於佛法中而爲沙門。佛言。善來比丘（汝、昔、我を嫌いて俱に是の言を作せり。長老瞿曇、世樂に耽著して、堅く戒を持せず。煩惱を断せんと欲して便ち即ち退墮せりと。我、適ま（たまたま）汝に近づくに各（おのおの）自ら安んぜざりき。是の故に當に知るべし。如来を稱呼して長老と爲すを得ざることを。五跋陀羅、俱に佛に白して言わく、世尊、我、今、願わくは佛法の中に於て、沙門と爲るを得んと。佛言わく、善來比丘と）」である。

<sup>57</sup> チベット訳は「比丘らよ、かくの如く言うことなかれと告げるや」という訳文になっており、前後の文意を調整しようとした痕跡がうかがわれる。上註の如く、方広には単に「善來比丘」と訳されている。

<sup>58</sup> チベット訳は「まさにそれによって、彼らは出家し、受戒して、比丘の身分を具えたり」という意味の訳文になっている。

<sup>59</sup> チベット訳には「比丘たちは」(bhikṣavas) に当たる訳語はない。

<sup>60</sup> チベット訳には「如来、阿羅漢」に相当する訳語がない。

<sup>61</sup> チベット訳には「阿羅漢」に相当する訳語がない。

<sup>62</sup> 「七宝」は「金・銀・琉璃・珊瑚・琥珀（こはく）・磲磈（しゃこ）・瑪瑙（めのう）」を指すと見るのが妥当と思われるが、他にも諸説がある。

<sup>63</sup> 東大主要写本には「阿羅漢」(arhatam) が挿入されているが、チベット訳によれば不要である。

<sup>64</sup> 「第四の座」とは「過去七仏が過去莊嚴劫の三仏と現在賢劫の四仏とに分けられる中で、「釈尊が現在賢劫の第四仏」に当たるとを示唆するものと思われる。『佛教語大辞典』155頁「過去七佛」参照。

<sup>65</sup> 「如来は」(tathāgataḥ) は東大主要写本には欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>66</sup> チベット訳には「かくの如く威力あり」に相当する訳文がない。

398 れらの] 光明を以て光明を、色を以て色を、威光を以て威光を熱することなく、輝かしめることなく、そこに生じたるところの衆生、彼らは、各自の腕を伸ばすとも [それを] 見ることなき [處]、そこにも、その時、広大なる光明が出現したり。また、そこに生じたる、かの衆生は、その光明に照らされるや否や、互いに見合い、互いに気づき合えり。そして、かくの如く言えり。「おお、何と！ 他の衆生もここに生じたるとは。おお、何と！ 他の衆生もここに生じたるとは」と。また、この三千大千世界は六種に震動し、十八の大瑞相を現じたり<sup>67</sup>。[すなわち] 震え、激しく震え、あまねく震えたり。揺れ、激しく揺れ、あまねく揺れたり。動き、激しく動き、あまねく動けり。動揺し、激しく動揺し、あまねく動揺せり。響き、激しく響き、あまねく響けり。轟き、激しく轟き、あまねく轟けり。辺際にて陥没し、中間にて隆起せり。中間にて陥没し、辺際にて隆起せり。東方にて陥没し、西方にて隆起せり。西方にて陥没し、東方にて隆起せり。南方にて陥没し、北方にて隆起せり。北方にて陥没し、南方にて隆起せり。また、その時、歡喜すべく、満足すべく、愛樂すべく、《なごやかにして<sup>68</sup>》心地よく、爽快ならしめ、讚歎さるべく、この上なく称揚さるべく、魅力あり、不快ならしめず、驚怖せしめることなき [種々なる] 音が聞こえたり。また、その刹那においては、如何なる衆生にも、悩乱も恐怖も戦慄も畏縮も生じることなかりき。さらにまた、その刹那にあり

400 ては、太陽と月の、また、帝釈・梵天・護世 [四天] 王たちの光明も知覚せられざりき。また、全ての地獄・畜生・餓鬼<sup>69</sup> (ヤマの世界) に生じたる衆生は、その刹那において、苦を離れ、あらゆる快樂に充たされたり。また、如何なる衆生も、貪欲や瞋恚や愚癡や、嫉妬や慳貪や慢心や猜忌や倨傲や忿怒や害意や熱惱によって煩悶することなかりき。一切の衆生は、その時、慈心と利益心とを有し、互いに母や父に対する [と同様なる] 想念を生じたり。また、その莊嚴なる光明から、かくの如き偈が発せられたり。

7. 兜率天宮より命終して、母の胎内に入りたる、彼は、  
    ルンビニーの森に誕生して、シャチー<sup>70</sup>の夫 (帝釈天) に抱き取られたり。
8. 勇猛なる獅子の足取りを以て、蒙昧なくして七歩を進みたる、彼は、  
    その時、「われは世間の最勝者なり」と、梵音の声を発したまえり。
9. 四洲 (全大地の王権) を捨てて、一切衆生の利益のために出家し、  
    困難なる苦行を修したるのち、菩提の座へと往詣したまえり。
10. マーラ (悪魔) を軍勢もろともに降伏し、世間の利益のために菩提を証得したり。  
    [彼は] ヴァーラーナシーに来詣し、法輪を転じたまわん。
11. 彼は、天神衆を伴える梵天に勧請せられたり。「正しき車輪 (法輪) を転じたまえ」 [と]。  
    世間に哀愍の心を生じて、牟尼 (仏陀) もまた [それに] 同意したまえり。
12. 彼は、まさに、堅き誓言を立てて、ヴァーラーナシーの鹿野苑に来詣せり。  
    彼は、実に、甚だ希有にして、光輝ある、無上の [法] 輪を転じたまわん。

<sup>67</sup> 「六種震動」とは「仏が説法する時の瑞相」であり、「①動 (kampita)、②起 (calita)、③涌 (vedhita)、④撃 (garjita)、⑤震 (kṣubhita)、⑥吼 (raṇita) の六種」をいい、そのそれぞれに「遍 (pra) と等遍 (saṃpra) という接頭辞を伴って、十八種あるという」(『佛教語大辞典』1453頁参照)。本経のこの箇所では、① akampat、② avedhat、③ acalat、④ akṣubhyat、⑤ araṇat、⑥ agarjat の順になっている。

<sup>68</sup> 「なごやかにして」(prasādanīyā) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>69</sup> yama-loka (ヤマ神の世界；閻魔界) は、ここでは「輪廻界の三悪道の一つである餓鬼道」を指している。

<sup>70</sup> śaci は「力；強力な援助」の意であるが、「インドラ (帝釈天) の妃の名」とされる。



- 402 13. 勝者（仏陀）が那由多もの劫に修集したる、その法を聴かんと欲する、  
その者は、速やかに、法を聴聞すべく、急ぎ到来せられたし。
14. 人身<sup>71</sup> [の獲得] と仏陀の出現とは値遇しがたく、浄信もまた甚だ得がたし。  
八無暇處<sup>72</sup>からの離脱は達し難ければ、[この世で] 法を聴聞することが最善なり。
15. 仏陀の出現と有暇（八無暇處以外の生まれ）と、また浄信と最勝なる聞法との、  
それらの全てが、今、得られたるが故に、一切の放逸を捨離せよ。
16. あるいは、那由多もの [多] 劫にわたり、法は聴聞せられざる可能性あり。  
されど汝らは、今、それを得たるが故に、一切の放逸を捨離せよ。
17. 地上等の [三界すべての] 天神衆を、梵天界に至るまで、かくの如く勸発<sup>73</sup>せり。  
「導師がまさに甘露（不死）の輪を転じたまうが故に、みな、急ぎ来たれ」[と]。
18. 大声を以て勸発せられたるや、全ての天神衆は、その刹那に、  
天界の榮華を捨てて、彼らは、仏陀の側に來集せり。

かくして、実に比丘らよ、大地の神々は、ヴァーラーナシーの《仙人墮處鹿野苑<sup>74</sup>》に、轉法輪のために《如来の<sup>75</sup>》大講堂を化作したり。[それは] 妙色あり、壯麗にして広大かつ豪壮なりて、縦横に七百由旬ありき。また上方には、天神衆が、傘蓋・旗幟・幢幡・[広げたる<sup>76</sup>] 帳蓋の莊嚴を以て、虚空を瑩飾したり。欲《界と色<sup>77</sup>》界の天子たちは、八万四千の獅子座を<sup>78</sup>如来に奉獻せり。「我ら<sup>404</sup>を哀愍するが故を以て、ここに坐して、<sup>79</sup>如来が法輪を転じたまわんことを」と [願望して<sup>80</sup>]。

また、実に比丘らよ、その時、東・南・西・北方と、上方・下方との、<sup>81</sup>周遍十方から、往昔の誓願を有する、幾拘胝もの [多数に及ぶ] 菩薩が來集し、如来の足元に敬礼して、轉法輪を勸請せり。また、この三千大千世界に存在する限りの、帝釈や梵天や護世 [四天] 王や、その他の<sup>81</sup>、偉大なる主にして大勢力を有する天子たち、彼らもまた、みな、如来の足元に頭面をつけて敬礼し、如来に轉法輪を勸請せり。「世尊は法輪を転じたまえ。善逝は法輪を転じたまえ。多くの人民の利益のため、多くの人民の安樂のため、世間への哀愍のため、多くの衆生と天神衆と人間たちの利得のため、利益のため、安樂のために。世尊よ、法の祭式を設けたまえ。法の大雨を降らせたまえ。法の大傘蓋を掲げたまえ。法の大螺貝を吹きたまえ。法の太鼓を叩きたまえ」[と]。

そこで、かくの如く言われる。

<sup>71</sup> 「人身」とは「[輪廻の中で得る] 人間としての生存」の意である。

<sup>72</sup> 八無暇處とは「八難（處）」ともいい、「仏を見ず、仏法を聞くことができない八種の難所」を指す。①地獄、②畜生、③餓鬼、④盲聾瘖瘂（感官に欠陥がある状態）、⑤世智辯聰（世俗智にたけていて正理に従わない生活）、⑥仏前仏後（仏陀が存在しない世）、⑦鬱单越（Uttarakuru）国（楽しみが多すぎる国）、⑧長寿天（長寿を楽しんで求道心が起こらない天界）の八處である。

<sup>73</sup> 「勸発」とは「道心を起こすように勧め激励すること」である。「下巻」には「かんぼつ」と読み仮名をつけたが、「かんぼつ」に訂正する。

<sup>74</sup> 〈 〉内の原文は東大主要写本には欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>75</sup> 「如来の」(tathāgatasya) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>76</sup> 「広げたる」(vitata) は東大主要写本に挿入されているが、チベット訳によれば不要である。

<sup>77</sup> 東大主要写本には「色界の」に当たる原文が欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>78</sup> 方広には「八萬四千寶師子座」と訳されている。

<sup>79</sup> チベット訳には、この箇所「今日」(do mod) が挿入されている。

<sup>80</sup> チベット訳は「～と懇願せり」(shes gsol to) という意味の訳文になっている。

<sup>81</sup> 「その他の」の部分、チベット訳では「彼ら以外の他の」という意味の訳文になっている。

- 19<sup>82</sup>. この三千 [世界] より、多くの梵天、天主 (帝釈)、また、護世王たちが来たり、  
 勝者 (仏陀) の足元に敬礼して、<sup>ごんおん</sup> 言音を発したり。「<sup>だいじて</sup> 大牟尼よ、  
 406 『われは最尊かつ最勝なる者として<sup>83</sup>、<sup>しやうるい</sup> 生類の苦を滅尽すべし』と、  
 御身が表明したるところの、<sup>おうしやく</sup> 往昔の誓言を想起されたし。
20. 牟尼よ、御身は<sup>じゅうおうげ</sup> 樹王下に坐して、<sup>まうら</sup> マーラ (悪魔) を軍勢もろともに<sup>こうぶく</sup> 降伏し、  
 極めて寂靜なる無上菩提を証得して、<sup>ぼんのうじゆ</sup> 煩惱樹を打ち倒したり。  
 百劫もの間に思念せられたる<sup>いがん</sup> 意願は、余すところなく<sup>じやうまん</sup> 《成満せられたるが故に<sup>84</sup>》、  
<sup>どうし</sup> 導師なき衆生を觀察したまいて、最勝なる [法] 輪を転じたまえ。」
21. 善逝 (如来) の光明により、百千もの国土が照らされ、  
 幾百もの<sup>ごうし</sup> 仏子 (菩薩) たちが、<sup>じんりき</sup> 神力によって到来せり。  
 [彼らは] 如来に対し、非常に豊富なる種々の供養をなして、  
 真実の諸徳を以て如来を<sup>さんだん</sup> 讚歎し、悲心ある者 (如来) に懇願せり。
22. 「悲心は雲、智慧は雷電、<sup>かんそう</sup> 観想<sup>85</sup> (ヴィパシュヤナー) は風の如くにして、  
 [御身は] <sup>せんこう</sup> 千劫にわたり、一切衆生を招呼し [雷鳴の如く] <sup>こうこう</sup> 吼号したり。<sup>86</sup>  
<sup>はっしやうどう</sup> 八正道の雨雲から雨を降らしめ、衆生の渴きを癒したまえ。  
 [五] <sup>りき</sup> 力・[五] <sup>こん</sup> 根・<sup>ごくりん</sup> 禪定・<sup>ほんも</sup> 解脱の穀林を繁茂せしめたまえ。
23. [御身は] 幾《千<sup>87</sup> 劫にもわたり、<sup>くう</sup> 空を善修し、<sup>しんによ</sup> 真如に止住せり。  
<sup>そうしやう</sup> 法より生じる医薬を造集し、<sup>しやうきやう</sup> 衆生の所行を了知せり。  
 煩惱の群による百もの病に<sup>ひつづう</sup> 逼惱せられたる、これらの衆生のために、  
 勝者たる医王よ、最勝なる [法] 輪を転じて [病苦より] <sup>げだつ</sup> 解脱せしめたまえ。
- 408 24. 御身は、<sup>じやうや</sup> 長夜 (長期間) において、<sup>ろくはらみつ</sup> 六波羅蜜の蔵を増大せしめ、  
<sup>くら</sup> 比類なき、かつ不動にして<sup>たくぜつ</sup> 卓絶せる<sup>ほうざい</sup> 法財をよく<sup>しやくじゅう</sup> 積集したり。  
 依怙なくして貧窮し、導師なき、これら一切の衆生を觀じたまいて、  
<sup>えんこ</sup> 七財<sup>88</sup>を分与すべく、<sup>ぜんどうし</sup> 善導師よ、何とぞ [法] 輪を転じたまえ。
25. 勝者の菩提を尋求するが故に、財宝や穀物、金貨や黄金、  
 また実に、美麗なる衣服、最上なる花・<sup>ずこう</sup> 塗香・<sup>くんこう</sup> 薫香・<sup>こうまつ</sup> 香末、  
 また、最勝なる宮殿、<sup>ちやうぐうまいにや</sup> 中宮姝女や王位、愛する我が子すら喜んで棄捨したる、  
 それなる<sup>しやうがくし</sup> 正覚者 [たる御身] は、最勝なる [法] 輪を転じたまえ。
26. さらにまた、<sup>けつろう</sup> 欠漏なく汚点なき<sup>ひやくこう</sup> 戒を百劫にわたり護持し、  
<sup>にんにく</sup> 常に忍辱をよく<sup>しやうじゅう</sup> 修習し、御身の<sup>しやうじん</sup> 精進には<sup>けだい</sup> 懈怠あることなかりき。

<sup>82</sup> この第19偈から第26偈までの韻律は名称が不明であるが、[sa-gaṇa(---) × 6] の形式を採っている。方広には、これらの偈に相当する部分は欠落している。

<sup>83</sup> 「下巻」には「最勝にして」と訳したが、文意を勘案して「最勝なる者として」に訂正する。

<sup>84</sup> 「成満せられたるが故に」(prapūrṇa) は東大主要写本には欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>85</sup> vipaśyanā (毘鉢舍那) とは「静まった心に対象の映像をありありと映し出すこと。禪定によって得られる静かな心により自在に観ずること。法を観想すること」である (『佛教語大辞典』1135頁「毘鉢舍那」参照)。

<sup>86</sup> 「下巻」には「千劫にわたり、一切衆生は [御身に] 招呼せられ、[雷鳴によるが如く] 吼号せられたり」と訳したが、チベット訳を参考に訂正する。なお「吼号」とは「吼え叫び呼ぶこと」である。

<sup>87</sup> 「千」(sahasra) は東大主要写本には欠けているが、韻律によってもチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>88</sup> 「七財」とは「信・戒・慚・愧・聞・捨・慧」の七をいう (『佛教大辞典』1893頁参照)。

至高の禪定と、神通・妙観<sup>89</sup>（ヴィパシュヤナー）・智慧・捨心<sup>90</sup>とを有する、  
牟尼よ、意願を成満せる煩惱なき者よ、最勝なる〔法〕輪を転じたまえ〔と〕。

410 その時、実に比丘らよ、サハチットーウトゥパーダダルマチャクラプラヴァルティン<sup>91</sup>（俱発心  
転法輪）と名づける菩薩摩訶薩が、その時、<sup>92</sup>あらゆる宝石で象眼され、あらゆる宝石で瑩飾され、  
種々なる莊嚴を以て飾られ、千輻の軸轆を有し、千の光線を発し、穀を有し、車輦を有し、花の瓔  
珞を有し、黄金の網を有し、鈴の羅網を有し、香りただよう絵画<sup>93</sup>を有し、満水の瓶を有し、ナン  
ディカーヴァルタ<sup>94</sup>〔の吉相〕を有し、スヴァスティカ<sup>95</sup>の装飾を有し、種々の色に染められたる天  
界の布を以て麗飾され、一切の最勝なる相を具足し、往昔の誓願によって出現し、菩薩の志願に  
よって清められ、如来を供養するにふさわしく、一切の如来によって護念され、一切の仏陀の加護  
によって壊れることなき、往昔の如来・阿羅漢・正等覺者たちによって受領され、過去にも転ぜら  
れたるところの法輪を、轉法輪のために、如来に献上したり。献上するや、また合掌して、如来を、  
かくの如き偈を以て讚歎せり。

27. 清浄なる衆生にして、人獅子中の獅子たる御身が、ディーバンカラ（燃燈仏）によって、  
「汝は実に《仏陀に<sup>96</sup>》成るべし」と授記せられたる、  
その時、われに、この、かくの如き誓願ありき。  
「〔御身が〕正等覺を得たならば、われは〔説〕法を勧請すべし」〔と〕。

412 28. 十方より、最勝なる衆生たちが、ここに来集せるも、  
それらの全てを校量<sup>97</sup>して数えること能わず。  
〔みな〕お辞儀して合掌し、両足に平伏して、  
釈迦族の王子〔たる御身〕に法輪を〔転じたまえと〕勧請せり。  
29. 天神たちによって菩提道場に用意せられたる莊嚴と、  
あらゆる勝者子（菩薩）たちによって造立せられたる莊嚴との、  
それら全ての莊嚴は、〔転〕法輪のために<sup>98</sup>、ここに造出せられたり。  
〔それらの莊嚴は〕劫を極めて語るとも説き尽くすこと能わず。  
30. 三千〔大千〕世界の天空は、天神衆により充満せり。

<sup>89</sup> vipaśyanā を「下巻」には「眼力」と訳したが、「妙観」に訂正する。なお、上記（註85）では「観想」と訳したが、意味は同じである。

<sup>90</sup> 「捨心」（upekṣā）とは四無量心（慈・悲・喜・捨）の一つであり、「何ごとにも執着せず平静なる心」を意味する。なお、チベット訳にはこれに当たる訳語はない。

<sup>91</sup> この菩薩名 saḥacittopādadharmacakrapravartin は「俱に転法輪を發心する」の意であるが、方広には単に「轉法」と訳されている。

<sup>92</sup> チベット訳はこの箇所「天界のジャンブー河産の黄金で作られた」という意味の訳文を挿入している。

<sup>93</sup> 「絵画」の原語 hasta は通常「手」を意味するが、チベット訳 [lag ris] (= hand-writing; figure; design) を参考に、「〔手で描かれた〕絵画」の意とみる。

<sup>94</sup> nandikāvarta (= nandyāvarta) は「吉相の図形の種類」であり「難提迦物多」と音訳されるが、これは元來「ヴィシュヌ神の毛髪が旋回せる様を模したものと」考えられている（『佛教大辞典』4756頁中段参照）。

<sup>95</sup> svastika は「吉兆のしるしとしての万字（卍）」である。

<sup>96</sup> 「仏陀に」（buddho）は東大主要写本には欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>97</sup> 「校量」とは「詳しく比べ量ること」である。

<sup>98</sup> チベット訳は「轉法輪のために」という意味の訳文になっている。

地上もまた、阿修羅・緊那羅・人間たちにより [充滿せり]<sup>99</sup>。  
 その須臾の間は、咳の声すら聞こえることなく、  
 みな、清浄心を抱きて、勝者（仏陀）を瞻観せり。

かくして、実に比丘らよ、如来は、初夜分（宵のうち）においては、黙然として住したまえり。中夜分（夜なか）においては、大衆の意に叶う（親しみ易い）談話を語りたまえり<sup>100</sup>。後夜分（深夜から未明）においては、五群賢者に呼びかけて、かくの如く説きたまえり。「比丘らよ、これら二つの極端は出家の路を乱すものなり。すなわち、諸々の愛欲において、愛欲の享樂に耽ることは<sup>101</sup>劣悪、卑俗にして、凡愚なり。真純ならず、有害にして、将来における梵行のためならず<sup>102</sup>、遠離のためならず、離欲のためならず、寂滅のためならず、神通のためならず、正等覺のためならず、涅槃のためならず<sup>103</sup>。また、かの中道にあらざるところの、自らの<sup>104</sup>身体の疲倦に専念する [苦] 行は辛苦あり、有害にして、現世において苦あるのみならず、来世においても苦の異熟（果報）あり。而して、比丘らよ、これら二つの極端に親近することなく<sup>105</sup>、まさしく中道によって、如来は法を説く。すなわち正見、正思惟、正語、正業<sup>106</sup>、正命、正精進、正念、正定 [の八正道] ありと。比丘らよ、これら四つの聖諦あり。何をか四となすや。苦（苦諦）と、苦の集起（集諦<sup>107</sup>）と、苦の滅（滅諦）と、苦滅に至る道（道諦）なり。そこにおいて、苦とは何か。生も老も病も死も苦なり。怨憎するものに会うことも、愛するものと別離することも苦なり。また、欲して求めるものを得られざることも苦なり。要するに、五取蘊（執著の素因となる五つの要素）は苦なり。これが苦（苦諦）と言われる。そこにおいて、苦の集起とは何か。これすなわち、再生をもたらず渴愛にして、喜樂への貪欲を伴い、至るところにて歓樂する。これが苦の集起（集諦）と言われる。そこにおいて、苦の滅とは何か。まさに、この、再生をもたらず渴愛にして、喜樂への貪欲を伴い、至るところにて歓樂するもの、[それらの] 産出と達成とへの貪欲が残余なく消滅すること、この消滅が苦の滅（滅諦）なり。そこにおいて、苦滅に至る道とは何か。これは、まさしく八支聖道なり。いわゆる〈正見乃至正定〉なりと [知るべし]。これが苦滅に至る道（道諦）にして、[他の聖諦とともに] 聖諦と言われる。比丘らよ、これらが四聖諦なり。比丘らよ、[われは] かつて聞かれたることなき諸法において、これは苦なりと正しく思惟し、幾度も修習せるが故に、正智を生じ、眼を生じ、明を生じ、英智を生じ、賢慮を生じ、智慧を生じ、[われに] 光明が発現したり。比丘らよ、われは、かつて聞かれたることなき諸法において、これは苦の集起なりと正しく思惟し、繰り返し吟味せるが故に、正智を生じ、眼を生じ、明を生じ、英智を生じ、賢慮を生じ、智慧を生じ、[われに] 光明が発現したり。比丘らよ、われは、これは苦の滅なりと、すべて上述の如くにして、

<sup>99</sup> チベット訳は「人間たちが充滿せり」という意味の訳文になっている。

<sup>100</sup> 方広には「安慰大衆令生歡喜」と訳されている。

<sup>101</sup> チベット訳は「諸々の愛欲において世俗の安樂に耽ることは」という意味の訳文になっている。

<sup>102</sup> チベット訳は「将来に梵行を生ずることなく」という意味の訳文になっている。

<sup>103</sup> 「下巻」には不注意により「涅槃のためならず」という訳文が欠落しているので、これを挿入する。

<sup>104</sup> チベット訳には「自らの」(ātma) に当たる訳語はない。

<sup>105</sup> チベット訳は「極端を捨てて」という意味の訳文になっている。

<sup>106</sup> 「下巻」には誤って「しょうぎょう」と読み仮名をつけたが、「しょうごう」に訂正する。

<sup>107</sup> 「集諦」の読み方には「じゅうたい」「じゅったい」「じったい」の三種がある。

乃至、光明が発現したり<sup>108</sup>。比丘らよ、われは、<sup>109</sup>これは苦滅に至る道なりと、上述と全く同文にして、乃至、光明が発現したり<sup>110</sup>。比丘らよ、われは、実にそれ、この<sup>111</sup>苦は遍知さるべしと、上述と全く同文にして、乃至、光明が発現したり。比丘らよ、われは、かつて聞かれたることなき諸法において、実にそれ、この苦の集起は滅除さるべしと、云々し、乃至、光明〔が発現したり〕というところまで、すべて上述の如し。比丘らよ、われは、実にそれ、この苦滅は現証さるべしと、云々し、乃至、光明〔が発現したり〕というところまで、上述の如し。<sup>112</sup>実にそれ、この苦滅に至る道は修習さるべしと、云々し、乃至、光明〔が発現したり〕というところまで、上述の如し。比丘らよ、われは、かつて聞かれたることなき〔諸法において〕、実にそれ、この苦は遍知されたりと、云々し、上述の如し。比丘らよ、われは、かつて聞かれたることなき〔諸法において〕、実にそれ、この苦は集起は滅除されたりと、云々し、上述の如し。比丘らよ、われは、かつて聞かれたることなき〔諸法において〕、実にそれ、この苦滅は現証されたりと、云々し、上述の如し。比丘らよ、《われは<sup>113</sup>》、かつて聞かれたることなき諸法において、実にそれ、この苦滅に至る道は修習されたりと、正しく思惟し、繰り返し吟味せるが故に、正智を生じ、眼を生じ、明を生じ、英智を生じ、賢慮を生じ、《智慧を生じ、<sup>114</sup>》〔われに〕光明が発現したり。

<sup>115</sup>かくして、実に比丘らよ、われは、これらの四聖諦において、正しく思惟しつつ、かくの如き〈三転十二行相〉の智見を生ずる、まさにその時までには<sup>116</sup>、比丘らよ、われは「無上なる正等覚を証得したり」と確信することなかりき。また、われに智見は〔まだ〕生起せずしてありぬ。比丘らよ、われは、これらの四聖諦において、かくの如く〈三転十二行相〉の智見を生じ、また、確固たる心解脱と慧解脱とを現証したるが故に、それ故に、比丘らよ、われは「無上なる正等覚を証得したり」と確信せり。また、われに智見が生じたり。われの生は尽きたり。梵行は成就せられたり。為されるべき事は為されたり。これより後の生存をわれは認識することなし<sup>117</sup>〔と〕。

そこで、かくの如く言われる。

31<sup>118</sup> 幾拘胝もの劫にわたって常に真実を善修せるが故に、  
千那由多もの特相により〔世間を〕超出せる自存者たる、  
かの釈迦牟尼は、梵音と緊那羅の声とを有する言葉を以て、  
カウンディンヤ<sup>119</sup>に説きたまえり。

<sup>108</sup>チベット訳は「乃至」を用いる省略法を採用せず、「これは苦の滅なりと、正しく思惟し、繰り返し吟味せるが故に、智を生じ、眼を生じ、明を生じ、英智を生じ、賢慮を生じ、智慧を生じ、光明が発現したり」と、上述の文をそのまま反復する訳文になっている。

<sup>109</sup>チベット訳には「かつて聞かれたることなき諸法において」という意味の訳文が挿入されている。

<sup>110</sup>この箇所では、チベット訳も「乃至」を用いる省略法を採用しているため、上記註108の箇所では省略法が用いられていないのは、チベット訳者の不注意によるものと思われる。

<sup>111</sup>チベット訳には「実にそれ、この」(yat khalv idam)に当たる訳文はない。

<sup>112</sup>チベット訳には「比丘らよ」(dge sloṅ dag)が挿入されている。

<sup>113</sup>「われは」(me)は東大主要写本には欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>114</sup>「智慧を生じ」(prajñōtpannā)は東大主要写本には欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>115</sup>「下巻」には、この箇所での改行がなされていないので、訂正して改行する。

<sup>116</sup>チベット訳は「知見を生じざるところの、まさにその間は」という意味の訳文になっている。

<sup>117</sup>方広には「我生已盡。梵行已立。所作已辦。不受後有（我が生は已に盡き、梵行は已に立し、所作は已に辦じて、後有を受せず）」と訳されている。

<sup>118</sup>この第31偈から第51偈までは、方広では偈頌ではなく長行（散文）で訳されている。

<sup>119</sup>kaunḍinyaとは、五比丘（五群賢者）の中で最初に仏説を理解したとされる Ājñāta-kaunḍinya（阿若憍陳如）のことである。

32. 眼は無常にして堅実ならず、耳も鼻もまた然り。  
 《舌も身も意も<sup>120</sup>》苦・無我にして、空なり。
- 420 無感覚を自性とする藁の壁の如く無作用<sup>121</sup>にして、  
 そこにおいては、我なく、人なく、また、命もなし<sup>122</sup>。
33. これら、一切の法は、因と縁より<sup>123</sup>生起し、  
 断見と常見とを<sup>124</sup>離れること、虚空の如し。  
 作者（行動主体）もなく、また受者（感受主体）もなくして、  
 しかも、為されたる不善業あるいは善業は消滅することなし<sup>125</sup>。
34. 諸蘊（五蘊）を縁として、実に、かくの如き苦〔の芽〕が発生し、  
 渴愛の水によって増長<sup>126</sup>しては出現する。  
 [神聖なる] 道によって<sup>127</sup>、法の平等性を観察すれば、  
 竟には滅滅し、尽滅の法性によって消失する。
35. 欲念と妄想より生じたる浅慮によって<sup>128</sup>、無明が生ずるも、  
 これ（無明）を生ぜしめるものは〔他に〕何もなし<sup>129</sup>。  
 [無明は] 行の因を与えるも、[行に] 転移するにあらず。  
 [行が] 転移することを縁として、識が生ずる。
36. 識より、同様に、名と色とが生起し、  
 名と色より六根<sup>130</sup>（六つの認識器官）が集起する。  
 それらの諸根の集合を触と呼ぶ。  
 また、触より三種の〔感〕受<sup>131</sup>が随転する。
37. 感受されるものは何であれ、その全てが〔渴〕愛と呼ばれ、  
 [渴] 愛より一切の苦蘊（五取蘊）が生起する。
- 422 [五] 取〔蘊〕より一切の有（迷界）が流転し、  
 有を縁として、また実に、その者の生（再生）が集起する。
38. 生を原因として老・病・死が生じ、  
 この有（迷界）の鳥籠<sup>132</sup>には、多種の出生あり。  
 かくの如く、そもそも、これら生類の全ては縁起生なり。

<sup>120</sup>〈 〉内の原文は東大主要写本には欠けているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>121</sup>「無作用」(niraha)とは「意志や欲望を持って活動することがない」という意味である。

<sup>122</sup>チベット訳は「我なく、名も命もなし」という意味の訳文になっており、方広には「無人無衆生」と訳されている。

<sup>123</sup>「下巻」には「因を縁として」と訳したが、誤訳と思われるので「因と縁より」に訂正する。

<sup>124</sup>「断見」と「常見」については第20巻第4号所載の拙訳（註198）を参照されたい。方広には「離常離断猶如虚空」と訳されている。

<sup>125</sup>方広には「善惡之法而不敗亡（善惡の法は敗亡せず）」と訳されている。

<sup>126</sup>「増長」とは「勢いを増し広がり来ること」である。

<sup>127</sup>方広には「若得聖道（若し聖道を得て）」と訳されている。

<sup>128</sup>方広には「由彼分別不正思惟（彼の分別の正しからざる思惟に由つて）」と訳されている。

<sup>129</sup>方広には「更無有餘爲無明因（更に餘の無明の因と爲るもの有ること無し）」と訳されている。

<sup>130</sup>「六根」とは五官（眼・耳・鼻・舌・身）に意（知覚作用）を加えたものである。

<sup>131</sup>「三種の受」とは「樂受（快感）」と「苦受（不快感）」と「不苦不樂受（快でも苦でもない感覚）」である（『佛教語大辞典』470頁「三受」参照）。

<sup>132</sup>「鳥籠」(pañjara)は「拘禁するものの譬喩」として用いられる。

- アートマンであれプドガラ<sup>133</sup>であれ、<sup>てんしやう</sup>転生する主体は何も存在せず。
39. 妄念なく妄想なきところ、それは<sup>じゆり</sup>如理（道理にかなう）と言われ、  
如理にてあるところ、そこには、如何なる<sup>むみやう</sup>無明もなく、  
無明なきところには寂滅が生じ、ここにおいて<sup>134</sup>、  
有支<sup>135</sup>の全ては<sup>しよしよ</sup>処所を失い消滅して<sup>136</sup>、<sup>じやくめつ</sup>寂滅に至る。
40. かくの如く、この<sup>えんぎしやう</sup>縁起性〔の理〕が如来によって覚知せられたり。  
それ故に、自存者（仏陀）は自ら自身に<sup>じやくき</sup>授記したり。  
われは<sup>うん</sup>蘊・<sup>しよ</sup>處・<sup>かい</sup>界<sup>137</sup>〔の認識〕を以て「正覚せり」とは説かず、  
因を了知することなくして、この世に、正覚のあることなし<sup>138</sup>。
41. また<sup>げがくいしゆう</sup>外学異宗に依拠する者たちの<sup>じやうぢ</sup>境地<sup>139</sup>は、ここには無きが故に、  
かくの如き法の道理に関する〔彼らとの〕議論は、今や空虚なり。  
往昔の<sup>ごくしやうじやう</sup>仏道を行じたる<sup>140</sup>、<sup>ごくしやうじやう</sup>極清浄なる衆生たち、  
彼ら〔のみ〕が、この法を理解することを得ん。
- 424 42. かくの如く、実に<sup>じやうにぎやうそう</sup>〈十二行相〉を以て、法輪が転ぜられたり。  
<sup>しこう</sup>而してカウンディンヤが覚知を得たるが故に、〔ここに〕<sup>さんぼう</sup>三宝が出現したり。
43. 仏陀と法と、また、<sup>そうぎや</sup>僧伽<sup>141</sup>との、これらが三宝にして<sup>142</sup>、  
〔その〕名声は〔天界に〕<sup>てんでん</sup>展転して、梵天界の宮殿にまで達したり。
44. 「世間の救助者なる保護者（仏陀）によって、<sup>じんく</sup>塵垢なき〔法〕輪が転ぜられ、  
世間に得難きこと、この上もなき、三宝が出現したり」と。
45. カウンディンヤを初めとなして、また、実に五名の比丘たちと、  
<sup>こーてい</sup>六十拘胝もの天神衆の<sup>ほうげん</sup>法眼<sup>143</sup>は清浄ならしめられたり。
46. <sup>しこう</sup>而してまた、他の、八十拘胝もの、<sup>こーてい</sup>色界に住する天神たち、  
彼らの<sup>まなこ</sup>眼も、法輪が転ぜられたる時、清浄ならしめられたり。
47. 〔そこに〕来集したる八万四千の人間たち、

<sup>133</sup>ātman は「輪廻する主体として想定される不滅の靈魂」であり、pudgala（補特伽羅）は「個人存在」の意であり、「物質性を帯びて輪廻していく個体」を指すものと思われる。

<sup>134</sup>「ここにおいて」（iha）は、チベット訳には「そこにおいて」（de na）と訳されている。

<sup>135</sup>「有支」とは「迷界（輪廻の生存）を構成する部分」の意である（『佛教語大辞典』82頁参照）。

<sup>136</sup>チベット訳は「消失し消滅して」という意味の訳文になっている。方広はこの箇所です「無明滅すれば行滅す」に始まる「十二因縁の逆観」の次第を詳述している。

<sup>137</sup>「蘊・處・界」とは「五蘊・十二處・十八界」を指す。

<sup>138</sup>チベット訳は「諸々の因を了知して正覚することを除いて、蘊・處・界等を正覚せりと説くことなし」という意味の訳文になっている。

<sup>139</sup>チベット訳には「境地」（bhūmi）に相当する訳語がなく、「ここに外学異宗の依拠するところなく」という意味の訳文になっている。

<sup>140</sup>「往昔の仏道を行じたる」（pūrvabuddhacaritā）は、チベット訳には「正等覚の仏道を行じたる」（yañ dag mñon sañs rgyas las spyad ciñ）と訳されており、梵文と合わない。

<sup>141</sup>「僧伽」（saṃgha）とは「仏となるための道を実践、修行する人たちの集団」であり、単に「僧」ともいい、「和合衆」と意識する（『佛教語大辞典』874頁参照）。

<sup>142</sup>チベット訳は「これらを三宝となし」という意味の訳文になっている。

<sup>143</sup>「法眼」（dharma-cakṣus）とは「法（真理）を見る智慧のまなこ」である。

彼らの眼も清浄ならしめられ、みな悪趣より解放せられたり。

48. その刹那において、十方の周遍無窮に、仏陀の音声が行き亘り、  
 美妙かつ甘美にして優美なる歌詠が、天空に聞こえたり。  
 「十力ある、この釈迦族の牡牛は、ヴァーラーナシーの仙人墮處に赴きて、  
 紛うかたなく、無上の法輪を転じたまいしなり」[と]。

49. [その時] 十方に住する幾百もの<sup>144</sup>仏陀の誰もが、みな沈黙したり。  
 それらの牟尼たちの侍者衆は、みな勝者（仏陀）に問えり<sup>145</sup>。

426

「歌詠を聞いて、何ゆえに十力（如来）たちは法の演説を中止したまうや。  
 いざ、速やかに演説されたし。何ゆえに、黙然として住したまうや」と。

50. 「[釈迦牟尼は] 幾百もの前生における精進力によって、菩提を成辨<sup>146</sup>せるも、  
 何百千回（何十万回）も引き返しては、菩薩 [の生] を受容せり。  
 それ故に、利益者（釈迦牟尼）によって、赫奕たる、吉祥なる菩提が得られ、  
 三転 [十二行相<sup>147</sup>] の法輪が転ぜられたり。それ故に [われらは] 沈黙せり」[と]。

51. それらの牟尼（如来）たちの、この言葉を聞くや、百拘胝もの衆生が、  
 慈心力を生じて、吉祥なる無上菩提に向かって発心せり。  
 「われらもまた、かの牟尼の卓越せる精進力を習学し、  
 速やかに、世間に法眼を施す、世間の最勝者と成るべし」[と]。

さて、その時、マイトレーヤ（弥勒）菩薩摩訶薩は、世尊（釈迦牟尼）に対して、かくの如く言  
 えり。「世尊よ、これらの、十方世界より来集せる菩薩摩訶薩は、世尊から [直接に] 転法輪の神  
 變の一部を聴聞せんと欲せり。それ故に、いざ世尊よ、如来・阿羅漢・正等覚者は説きたまえ。如  
 来は如何なる種類の法輪を転じたまえるや」[と]。世尊は宣えり。「マイトレーヤよ、その法輪は  
 甚深なり、深みを測り難きが故に。その輪は見難し、二辺（対立する二つの極端）を離れたるが故  
 に<sup>148</sup>。その輪は覚知し難し、思惟によって思惟せられざるが故に。その輪は識別し難し、聖知と俗  
 知との平等性を認識するが故に。その輪は無濁なり、障礙なき解脱を得たるが故に。その輪は微妙  
 なり、譬喩による例証を超越せるが故に。その輪は堅実なり、金剛の如き智によって得られたるが  
 故に。その輪は破碎されず、過去に起因せざる（存立の原因を有せざる）が故に<sup>149</sup>。その輪は戯  
 論<sup>150</sup>なし、一切の戯論の過失を遠離<sup>151</sup>せるが故に。その輪は確乎たり、終極の究竟なるが故に。そ  
 の輪は一切処に随入する、虚空に相似せるが故に。実にまた、マイトレーヤ（弥勒）よ、その法輪

428

<sup>144</sup>チベット訳には「幾百もの」に当たる訳語はない。

<sup>145</sup>チベット訳には「問えり」に当たる訳語はない。

<sup>146</sup>「成辨」とは「成就し、完成すること」である。

<sup>147</sup>「下巻」には「十二形相」と誤記したので、「十二行相」に訂正する。

<sup>148</sup>方広にも「離二邊故」と訳されている。

<sup>149</sup>方広には「無本際故」と訳されている。

<sup>150</sup>「戯論」とは「無益な言論（仏道修行に役立たない議論）」である。

<sup>151</sup>「遠離」とは「遠ざかり離れること」であるが、特に「現世の執着、およびその執着の因縁となるものを遮絶、超越すること。世俗のけがれとまじわらないこと」をいう（『佛教語大辞典』140頁参照）。なお、「下巻」には「えんり」と振り仮名をつけたが、「おんり」に訂正する。



は、一切法の本性と自性とを顕現せしめ〔また〕消滅せしめる輪なり。不生・不滅・不可得なる輪なり。依處なき輪なり。妄念なく妄想なき法理を完成する輪なり。空性なる輪なり。無相なる輪なり。無願なる輪なり。無作（無為）なる輪なり。遠離（空寂）の輪なり。離貧の輪なり。寂滅の輪なり。如来の証悟せる輪なり。法界を雑乱せざる輪なり。〈真実の辺際〉（究極の真理）<sup>152</sup>を擾乱せざる輪なり。執著なく障礙なき輪なり。縁起に透徹し二つの極端を超出せる輪なり。辺際も中間もなき法界を擾乱せざる輪なり。仏陀の所用に自発的に仕えて止息することなき輪なり<sup>153</sup>。活動せず生成せざる輪なり。畢竟知覚せられざる輪なり。来入〔するもの〕なく去出〔するもの〕なき輪なり<sup>154</sup>。不可説なる輪なり。本来あるがままの輪なり。一つの対象において一切法の平等性に了達<sup>155</sup>する輪なり。衆生教化の断固たる決意ありて不退転なる輪なり。不二にして具象化されざる最勝義の道理に趣入する輪なり<sup>156</sup>。法界に遍入する輪なり<sup>157</sup>。その輪は無量なり、一切の量（判断基準）を超越せるが故に。その輪は無数なり、一切の数を超出せるが故に。その輪は不可思議なり、心意の道を超過せるが故に。その輪は無比なり、比類なきが故に。その輪は不可説なり、一切の音声による表現手段を除去せるが故に<sup>158</sup>。量り難く、比べ難く、比較を絶し、虚空と同等にして、断滅せず、常恒ならず、縁起への趣入を妨げることなく、静穏なる究竟の寂靜にして、真実なり、真如にして虚妄なく、誤謬なく、変異することなく、一切衆生の声に反響し、諸のマーラ（悪魔）を征圧し、諸の外道を摧伏し、輪廻の境界より超出せしめ<sup>159</sup>、仏陀の境界に趣入し、諸の聖者によって証知せられ<sup>160</sup>、諸の独覚（縁覚）によって覚知せられ<sup>161</sup>、諸の菩薩によって護持せられ、一切の仏陀によって称讃せられ<sup>162</sup>、一切の如来と差別あることなし。マイトレーヤ（弥勒）よ、如来は、かくの如き種類の法輪を転じたり。〔すなわち〕それを転ずるが故に、如来は如来と呼ばれ、〔仏陀と呼ばれ、<sup>163</sup>〕正等覚者と呼ばれ、自存者と呼ばれ、法主と呼ばれ、導師と呼ばれ、教導者と呼ばれ、先導者と呼ばれ、商主（隊商の長）と呼ばれ、一切法の自在主と呼ばれ、法の支配者と呼ばれ、転法輪者と呼ばれ、法の施主と呼ばれ、祭主と呼ばれ、祭祀の妙手<sup>164</sup>と呼ばれ、戒行の成就者と呼ばれ、意願の成満者と呼ばれ、説者と呼ばれ、慰安者と呼ばれ、安穩の施与者と呼ばれ、勇者と呼ばれ、煩惱の征圧者と呼ばれ、戦闘の勝利者と呼ばれ、傘蓋・旗幟・幢幡を掲げる者と呼ばれ、光明を発する者と呼ばれ、灯火を点す者と呼ばれ、闇を払う者と呼ばれ、炬火を把持する者と呼ばれ、大医王と呼ばれ、真実の治病者と呼ばれ、偉大なる外科医と呼ばれ、智見に暗翳なき者と呼ばれ、普く見る者

<sup>152</sup>「真実の辺際」（bhūta-koṭi）とは「究極の根拠」の意であり、「實際（じっさい）」と漢訳される。「実在の極限。存在の究極的なすがた」「永遠なる究極の真理」等と説明される（『佛教語大辞典』597頁「實際」；1163頁「不生實際」参照）。

<sup>153</sup>方広には「契於諸佛無功用行」と訳されている。

<sup>154</sup>方広には「不出不入」と訳されている。あるいは「取得なく捨棄なき輪なり」と訳すべきか？

<sup>155</sup>「了達」（avatāra）とは「深く入って了解すること。理解がゆきとどくこと」である。なお、avatāraは通常「権化（神力によって他のものの姿に化身すること）」の意とされるが、ここでは「ある境地に透徹すること」の意で用いられている。

<sup>156</sup>方広には「是爲不二非可安立。帰第一義入実相法（是を不二と爲す、安立す可きに非ず。第一義に帰し、実相の法に入る）」と訳されている。

<sup>157</sup>方広には「法界平等」と訳されている。

<sup>158</sup>方広には「言語路断」と訳されている。

<sup>159</sup>チベット訳は「輪廻の境界を超出し」という意味の訳文（ḥkhor baḥi yul las ḥdaḥ ba）になっている。

<sup>160</sup>方広には「聖智所行（聖智の行ずる所）」と訳されている。

<sup>161</sup>方広には「辟支所證」（辟支の證する所）」と訳されている。

<sup>162</sup>チベット訳には「一切の仏陀によって称讃せられ」に相当する訳文がない。

<sup>163</sup>「仏陀と呼ばれ」（buddha ity ucyate）は東大主要写本に挿入されているが、チベット訳によれば削除すべきである。

<sup>164</sup>「祭祀の妙手」（suyasṭa-yajña）とは「適切に祭祀を設ける者」の意である。方広には「大施主」と訳されている。

と呼ばれ、普く観察する者と呼ばれ、普遍なる<sup>まなこ</sup>眼と呼ばれ、普遍なる灯火と呼ばれ、普遍なる光明と呼ばれ、普遍なる門<sup>ふもん</sup>165と呼ばれ、普遍なる賢善<sup>ふげん</sup>166と呼ばれ、普遍なる<sup>たんごん</sup>端嚴と呼ばれ、無住<sup>むじゅう</sup>167にして無取<sup>むしよ</sup>かつ無捨<sup>むしよ</sup>168と呼ばれる。[また]高拳も低屈もなきが故に、大地の如き者と呼ばれ、動揺せざるが故に、山王の如き者と呼ばれ、一切の功德を具足せるが故に、一切世間の<sup>はま</sup>替れと呼ばれ、一切世間を超出せるが故に、頭頂の見えざる者と呼ばれ、甚深にして測り難きが故に、大海の如き者と呼ばれ、一切の菩提分の<sup>ほうぼう</sup>法宝を成満せるが故に、法宝の蔵と呼ばれ、依處なきが故に、風の如き者と呼ばれ、<sup>むじやく</sup>無著かつ<sup>むじやく</sup>無縛にして散乱せざる心を有するが故に、執著なき理智と呼ばれ、一切法に通達せるが故に、不退転なる法と呼ばれ、近づき難くして一切の<sup>きょうまん</sup>憍慢を断滅し一切の煩惱を<sup>しょうじん</sup>焼尽することに専念せるが故に、火の如き者と呼ばれ、<sup>けが</sup>想念に穢れなく身心は無垢なりて罪惡は洗い流されたるが故に、水の如き者と呼ばれ、<sup>ぜんじやく</sup>知の対象に<sup>せんじやく</sup>染著せず<sup>ほっかい</sup>辺際も<sup>きょうしよ</sup>中間もなき法界の行處（行動範囲）に関する<sup>しやうち</sup>正智と<sup>じんずう</sup>神通（超越的知見）とを得たるが故に、<sup>こくう</sup>虚空の如き者と呼ばれ、<sup>しょうげ</sup>障礙となる一切の法を残らず除滅せるが故に、障礙なき正智と解脱とに住する者と呼ばれ、天空の如く視界を絶するが故に、一切の法界に<sup>きんじやく</sup>拡張せる身体〔を有する者〕と呼ばれ、一切の世俗的享樂への煩惱なきが故に、最勝なる衆生と呼ばれ、執著なき衆生と呼ばれ、無量なる覚知と呼ばれ、出世間の法を説く者と呼ばれ、世間の教師と呼ばれ、世間の<sup>とうびやう</sup>塔廟と呼ばれ、世間を超出せる者と呼ばれ、世俗の法に<sup>おせん</sup>汚染せられざる者と呼ばれ、世間の<sup>さいそんしや</sup>庇護者と呼ばれ、世間の<sup>さいそんしや</sup>最尊者と呼ばれ、世間の<sup>さいそんしや</sup>最勝者と呼ばれ、世間の自在主と呼ばれ、世間の<sup>さいそんしや</sup>尊崇者と呼ばれ、世間の<sup>さいそんしや</sup>帰依処と呼ばれ、世間の彼岸に到達せる者と呼ばれ、世間の<sup>しやうせけんしや</sup>燈明と呼ばれ、<sup>しやうせけんしや</sup>出世間者と呼ばれ、世間の<sup>どう</sup>尊師<sup>169</sup>と呼ばれ、世間を<sup>やく</sup>利益する者と呼ばれ、世間に<sup>ずいじゆん</sup>随順する者と呼ばれ、<sup>せけんげ</sup>世間解（世間を知る者）と呼ばれ、世間の王権を得たる者と呼ばれ、偉大なる<sup>おうぐしよ</sup>聖人<sup>170</sup>と呼ばれ、<sup>おうぐしよ</sup>供養に値する者（<sup>ふくでん</sup>応供者）と呼ばれ、偉大なる<sup>ふくでん</sup>福田と呼ばれ、偉大なる衆生と呼ばれ、最高の衆生と呼ばれ、最上の衆生と呼ばれ、殊勝なる衆生と呼ばれ、至高の衆生と呼ばれ、無上の衆生と呼ばれ、無比なる衆生と呼ばれ、比類なき衆生と呼ばれ、常に三昧に専念せる者と呼ばれ、一切法の<sup>びやうどうしやう</sup>平等性に住する者と呼ばれ、<sup>どう</sup>道<sup>171</sup>を得たる者と呼ばれ、道を示す者と呼ばれ、道を説く者と呼ばれ、道を確立せる者と呼ばれ、マール（<sup>しやうりやう</sup>惡魔）の境界を超出せる者と呼ばれ、マール〔軍〕の<sup>しやうりやう</sup>円陣を破壊する者と呼ばれ、老死なくして清涼を得たる者と呼ばれ、盲闇を滅除せる者と呼ばれ、疑惑を滅除せる者と呼ばれ、疑念を滅除せる者と呼ばれ、煩惱を滅除せる者と呼ばれ、疑心を調伏せる者と呼ばれ、疑意を<sup>きい</sup>摧滅せる者と呼ばれ、<sup>まいめつ</sup>貪愛なき者と呼ばれ、<sup>とんあい</sup>解脱せる者と呼ばれ、清浄なる者と呼ばれ、<sup>とんよく</sup>貪欲を滅除せる者と呼ばれ、<sup>しんに</sup>瞋恚を滅除せる者

165「普遍なる門」(samanta-mukha)とは「あまねく（一切衆生に）門を開いていること」である。方広にも「普門」と訳されている。

166「普遍なる賢善」(samanta-bhadra)とは「あらゆる点で殊勝なもの」の意（岩本裕『日本佛教語辞典』、平凡社、1988、612頁「普賢」参照）。通常「普賢菩薩」の名として用いられ、「普はあらゆるところに遍じている意。賢は最も妙善の意。さとりを求める心がおこす願や行がすべて平等で、あらゆるところに遍じ、その心が妙善である菩薩の意」と説明される（『佛教語大辞典』1180頁「普賢菩薩」参照）。

167「無住」(apratiṣṭha)とは「何ものにも停住することのない無執着の境地にあること」を意味する。

168「無取」(anāyūha)とは「必要以上に取著する（こだわる）ことのないこと」であり、「無捨」(aniryūha)とは「必要なものを捨て去ることのないこと」である。

169「尊師」(guru)は、チベット訳には「ラマ」(bla ma)と訳されている。

170 dakṣiṇīyaは「尊敬せらるべき価値のある：供養されるに相応しき」の意である。『下巻』には「応供〔者〕」と訳したが、「聖人」に訂正する。

171「道」(mārga)とは「正道：聖道」の意である。方広にも「名得道（得道と名け）」と訳されている。

と呼ばれ、愚癡を滅除せる者と呼ばれ、漏泄（煩惱の泄出）の尽きたる者と呼ばれ、煩惱なき者と呼ばれ、心自在を得たる者と呼ばれ、完全に解脱せる心〔有する者〕と呼ばれ<sup>172</sup>、《完全に》解脱せる智慧〔有する者〕と呼ばれ、高貴なる者と呼ばれ、偉大なるナーガ（龍）と呼ばれ、義務を達成せる者と呼ばれ、任務を遂行せる者と呼ばれ、重荷を解かれたる者と呼ばれ、自利を達得せる者と呼ばれ、有（生存）への結縛を尽滅せる者と呼ばれ、平等性の智によって解脱せる者と呼ばれ、究竟なる一切の心自在の彼岸に達したる者と呼ばれ、布施の彼岸に達したる者と呼ばれ、持戒によって超出せる者と呼ばれ、忍辱の彼岸に達したる者と呼ばれ、精進によって超出せる者と呼ばれ、禪定と神通（超越的知見）とを得たる者と呼ばれ、智慧（般若）の彼岸に達したる者と呼ばれ、誓願を成就せる者と呼ばれ、大慈〔心〕に住する者と呼ばれ、大悲〔心〕に住する者と呼ばれ、大喜〔心〕に住する者と呼ばれ、大捨〔心〕に住する者と呼ばれ、衆生攝受に専心する者と呼ばれ、蓋障なき無礙辯を得たる者と呼ばれ、〔世間の〕依止処たる者<sup>173</sup>と呼ばれ、大福德者と呼ばれ、大智者と呼ばれ、正念と慧（思慮）と行<sup>174</sup>（理解力）と覚知<sup>175</sup>（道理を分別する知恵）とを具足せる者と呼ばれ、〔四〕念處と〔四〕正断と〔四〕神足と〔五〕根と〔五〕力と〔七〕覺支と<sup>176</sup>寂止（精神集中）と勝觀（実相觀察）とにより明知を得たる者と呼ばれ、輪廻の波濤を渡りたる者と呼ばれ、彼岸に達したる者と呼ばれ、陸地に立てる者と呼ばれ、安穩を得たる者と呼ばれ、無畏を得たる者と呼ばれ、煩惱の棘を拔除せる者と呼ばれ、丈夫と呼ばれ、大丈夫<sup>177</sup>と呼ばれ、人中の獅子と呼ばれ、恐怖による身毛豎（身の毛のよだつこと）のなき者と呼ばれ、ナーガ<sup>178</sup>（象）と呼ばれ、無垢〔なる者〕と呼ばれ、三垢穢<sup>179</sup>を滅除せる者と呼ばれ、賢者と呼ばれ、三明<sup>180</sup>を達得せる者と呼ばれ、四瀑流<sup>181</sup>を渡りたる者と呼ばれ、唯一なる宝蓋<sup>182</sup>を保持する〔が故に〕クシャトリア（刹帝利）と呼ばれ<sup>183</sup>、悪法を捨離せる〔が故に〕バラモン（婆羅門）と呼ばれ、無明の卵殻を割りたる〔が故に〕比丘と呼ばれ<sup>184</sup>、一切の愛著〔の道<sup>185</sup>〕を超越せる〔が故に〕沙門と呼ばれ、煩惱を涸渴せしめたる〔が故に〕浄行者と呼ばれ<sup>186</sup>、剛強なる者と呼ばれ、十力を具有する者と呼ばれ、世尊と呼ばれ、身

<sup>172</sup> 方広には「心淨解脱」と訳されている。

<sup>173</sup> pratisāraṇa-bhūta は「拠りどころとなった」の意であり、『下巻』には「依處に成りたる者」と訳したが、「依止処たる者」に訂正する。方広には「與世間作大依止」と訳されている。

<sup>174</sup> 「行」(gati) には「気がついた事からよく觀察思惟すること。考察」（『佛教語大辞典』241頁「行」参照）、さらに「理解〔力〕」(understanding, comprehension) の意味がある (cf. BHSD.gati)。

<sup>175</sup> 『下巻』には「理知」と訳したが、「覚知」に訂正する。「覚知」(buddhi) とは「道理を分別する知恵（理性）」である。なお、この部分全体の方広の訳文は「名念慧行覚成就」である。

<sup>176</sup> チベット訳には、この箇所には「〔八正〕道」に当たる訳語 (lam) が挿入されている。

<sup>177</sup> 「丈夫」(puruṣa) とは「立派な男」「益荒男（ますらお）」の意であり、「大丈夫」(mahāpuruṣa) とは「偉大な益荒男」の意である。

<sup>178</sup> 「ナーガ」(nāga) は通常「龍」とされるが、「象」の意味もある。

<sup>179</sup> 「三垢（三垢穢）」とは「貪瞋痴（貪欲・瞋恚・愚癡）」である。

<sup>180</sup> 「三明」とは「過去・現在・未来を知る力」（宿命通、天眼通、漏神通）である。

<sup>181</sup> 「瀑流」とは、煩惱が内心の善性を押し流すこと暴流の如くであることから、煩惱の異名として瀑流という。四瀑流とは「欲瀑流・有瀑流・見瀑流・無明瀑流」の四つである（『佛教語大辞典』530-531頁参照）。

<sup>182</sup> 「宝蓋」とは「宝石の傘蓋」の意である。『下巻』には「法蓋」と誤記したので、「宝蓋」に訂正する。

<sup>183</sup> チベット訳は「宝蓋を保持する唯一者に成れるが故に、クシャトリアと呼ばれる」という意味の訳文になっている。方広には「持制多故名刹利（制多を持するが故に刹利と名け）」と訳されている。

<sup>184</sup> 方広には「破壊無明藏故名比丘（無明藏を破壊するが故に比丘と名け）」と訳されている。

<sup>185</sup> チベット訳には「道」(patha) に当たる訳語はない。

<sup>186</sup> 「浄行者」(śrotriya) とは「ヴェーダ聖典に通じた博学の婆羅門」を指し、「浄行婆羅門」とも訳される。チベット訳は「煩惱を觀察せるが故に、浄行者と呼ばれる」という意味の訳文になっており、方広には「盡諸漏故。名清浄者（諸漏を盡す

体を修習せる者と呼ばれ、王を超えたる王と呼ばれ、法の王と呼ばれ、殊勝なる法輪を転じて化導する者と呼ばれ、確乎たる法を説く者と呼ばれ、一切知智〔の位〕に灌頂せられたる者と呼ばれ、執著なき大智にして無垢なる解脱の〔位を示す〕冠纓を着けたる者と呼ばれ、七覚支の宝石を具有する者と呼ばれ、傑出せる一切の法《宝》<sup>187</sup>を得たる者と呼ばれ、高貴なる大臣たる一切の声聞（弟子）たちによって顔貌を瞻仰せられたる者と呼ばれ、《息子たる》<sup>188</sup>菩薩摩訶薩たちに圍繞せられたる者と呼ばれ、弟子をよく教化する者と呼ばれ、菩薩をよく授記する者と呼ばれ、毘沙門天の如き者と呼ばれ、七聖財<sup>189</sup>の宝物を分与する者と呼ばれ、惜しみなく施す者と呼ばれ、一切の安楽と栄華を具足せる者と呼ばれ、一切の願望を叶える者と呼ばれ、一切世間を利益と安楽によって擁護する者と呼ばれ、インドラ（帝釈天）の如き者と呼ばれ、最勝智の金剛杵を持つ者と呼ばれ、普遍なる眼〔を有する者〕と呼ばれ、一切法を蓋障なき正智<sup>190</sup>によって観察する者と呼ばれ、正智によって隨處に变现する者<sup>191</sup>と呼ばれ、廣大なる法の歌舞上演に登場する者と呼ばれ、月の如き者と呼ばれ、一切衆生の眼に厭足を生ぜしめざる者と呼ばれ、清浄にして普遍廣大なる光明〔を發する者〕と呼ばれ、《歡喜と愉悅を与える光明と呼ばれ、<sup>192</sup>一切衆生のそれぞれに對面して姿を顯示する者と呼ばれ、一切衆生の心意の器に相應せる顕現を會得せる者と呼ばれ、大莊嚴と呼ばれ、有学（学修者）と無学（阿羅漢）とから成る星座に圍繞せられたる者と呼ばれ、日輪の如き者と呼ばれ、愚癡の盲闇を除去せる者と呼ばれ、大いなる旗を掲げたる王と呼ばれ、無量無辺なる光明〔を發する者〕と呼ばれ、宏遠なる光輝を示現する者と呼ばれ、あらゆる質問への応答説明に困惑せざる者と呼ばれ、無知の大暗冥を破壊する者と呼ばれ、正智の大光明に照らされたる覚知ある者《と呼ばれ<sup>193</sup>》、謬見なき者と呼ばれ、廣大なる慈・愍・悲〔の心〕を以て一切衆生に平等なる光明を放射して限界無量なる者と呼ばれ、甚深にして難知かつ難見なる般若波羅蜜の光輪を有する者と呼ばれ、ブラフマン（梵天）の如き者と呼ばれ、静穩なる威儀を有する者と呼ばれ、一切の威儀と妙行<sup>194</sup>とを具備せる者と呼ばれ、最高の容色を保持する者と呼ばれ、いくら観ても厭足することなき者<sup>195</sup>と呼ばれ、諸根寂靜なる者と呼ばれ、心意寂靜なる者と呼ばれ、寂止（精神集中）の資糧を具備せる者と呼ばれ、至上の寂止を得たる者と呼ばれ、最高の自制と寂止とを得たる者と呼ばれ、寂止と勝觀（実相觀察）との資糧を具備せる者と呼ばれ、感官は制御され保護されて象の如くよく調御され、湖水の如く純粹にして汚れなく甚だ清澄なる者と呼ばれ、一切煩惱の習氣（潜在余力）による障礙を完全に断滅せる者と呼ばれ、三十二の大人相を具足せる者と呼ばれ、最勝なる丈夫と

が故に清浄者と名く）」と訳されている。

<sup>187</sup>「宝」の原語 (ratna) は全写本に欠落しているが、チベット訳 [chos rin po che] によれば dharmaratna (法宝) と読むべきである。

<sup>188</sup>「息子たる」(putra) は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳にはこれに相当する訳語 (sras) がある。

<sup>189</sup>「七聖財」(七財) とは「仏道修行に必要なものを財にたとえて七つあげたもの」であり、「信財・戒財・慚財・愧財・聞財・捨財・慧財」の七つである（『佛教語大辞典』582頁参照）。

<sup>190</sup>チベット訳には「正智」(jñāna) に相当する訳語がなく、「蓋障なく観察する者」という意味の訳文になっている。方広には「見一切法無障礙」と訳されている。

<sup>191</sup>原文 (samantajñānavikurvaṇa) は「普遍なる正智によって变现する者」の意であるが、チベット訳を参考に「正智によって隨處に变现する者」と訳した。方広には「普智作大神通」と訳されている。

<sup>192</sup>《 》内の原文は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳にはこれに相当する訳文がある。

<sup>193</sup>「と呼ばれ」(ity ucyate) は全写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>194</sup>「妙行」(caryāviśeṣa) とは「すぐれた行為」の意である。方広には「勝行」と訳されている。

<sup>195</sup>「下巻」には「容姿の麗しき者」と訳したが、チベット訳を参考に「いくら観ても厭足することなき者」に訂正する。方広にも「見無厭足」と訳されている。

呼ばれ、八十の種々なる随好相<sup>ずいこうそう</sup>に身体を飾られたる者と呼ばれ、人中の牡牛<sup>にんちゅう おうし</sup>と呼ばれ、十力を具有する者と呼ばれ、四無所畏<sup>しむしゆい</sup>を得たる最勝なる丈夫調御士<sup>じやうぶじやうごし</sup>と呼ばれ<sup>196</sup>、教師と呼ばれ、十八不共仏法を具足せる者と呼ばれ、身・語・意の行為に瑕疵なき者と呼ばれ、一切の妙相を具足せる〔が故に〕極清浄なる智の曼陀羅（輪円）を有する者《と呼ばれ<sup>197</sup>、縁起の平等性を現等覺（証得）せるが故に〈空性に住する者〉と呼ばれ、勝義諦の理趣に通達せるが故に〈無相に住する者〉と呼ばれ、一切の願求に汚染せられざるが故に〈無願に住する者〉と呼ばれ、一切の有為（心の造作）が止息せるが故に〈造作（業の造集）の領域にあらざる者<sup>198</sup>〉と呼ばれ、真実の辺際（究極の真理）を知る正智の境界に擾乱なきが故に〈真実を語る者〉と呼ばれ、真如と法界と虚空相<sup>199</sup>【と無相<sup>200</sup>】とを知る境界にあるが故に〈虚妄なく誤謬なく語る者〉と呼ばれ、一切法を幻・陽炎・夢・水中の月〔影〕・谷響・鏡像の如しと観じて住するが故に〈無諍の法を会得せる者<sup>201</sup>〉と呼ばれ、完全なる涅槃（般涅槃）の因を生ぜしめるが故に〈見ても聞いても益ある者〉と呼ばれ、衆生教化に勇猛に邁進するが故に〈歩行に益ある者〉と呼ばれ、無明と有愛<sup>202</sup>とを根絶せるが故に〈壕溝を跳び越えたる者〉と呼ばれ、出離（解脱）に導く行法を善説するが故に〈橋梁を架けたる者〉と呼ばれ、如何なるマール（悪魔）の境界や所行にも染著せざるが故に〈マール（悪魔）と煩惱なる賊とを降伏せる者〉と呼ばれ、欲界を超出せるが故に〈愛欲の泥沼より上がりたる者〉と呼ばれ、色界を超出せるが故に〈慢心の旗を降ろしたる者<sup>203</sup>〉と呼ばれ、無色界を超出せるが故に〈智慧の旗を掲げたる者<sup>204</sup>〉と呼ばれ、法の身体と正智の軀体とを有するが故に<sup>205</sup>〈世俗的境界の一切を超出せる者〉と呼ばれ、徳宝たる正智の花が無辺に咲き誇り解脱の果実が豊かに実りたるが故に〈大樹〉と呼ばれ、出現にも観見にも遭い難きが故に〈ウドウンバラの花（優曇鉢華）の如き者〉と呼ばれ、理に適う出離（解脱）への願望をよく満足せしめるが故に〈如意宝珠<sup>206</sup>の〔珠<sup>207</sup>〕王の如き者〉と呼ばれ、長夜（長期間）にわたり、棄捨・持戒・苦行・禁戒・梵行を堅固なる誓約によって堅忍不拔に護持せるが故に、〈足下平安なる者〉と呼ばれ、長夜にわたり、父母・沙門・婆羅門・師主・応供者<sup>208</sup>・随法行者<sup>209</sup>を〔守護〕擁護し、庇護を求める者たちを見捨てざるが故に、〈足裏に多彩なるスヴァステイカ（吉祥万字）・ナンディアーヴァルタ<sup>210</sup>・千輻輪の相を有する者〉と呼ばれ、長夜にわたり、

<sup>196</sup>チベット訳は「四無所畏を得たる者と呼ばれ、最勝なる丈夫調御士と呼ばれる」という意味の訳文になっている。

<sup>197</sup>「と呼ばれ」(ity ucyate)は諸写本・諸校訂本に欠落しているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>198</sup>方広には「無功用行」と訳されている。

<sup>199</sup>「虚空相」(ākāśalakṣaṇa)とは「清浄で、認識するものも認識されるものもない相」の意であり、「虚空はさとのたとえ」である（『佛教語大辞典』350頁参照）。

<sup>200</sup>チベット訳には「無相」(alaksṣaṇa)に相当する訳語がないが、方広には「真如法界虚空相無相智境界」と訳されている。

<sup>201</sup>チベット訳は「煩惱なき法に通達せる者」という意味の訳文になっている。「無諍」(araṇa)とは「他人と争わないこと」であるが、争いの根本は「煩惱」であるから、諍(raṇa)は「煩惱」に同意とされる(cf. BHSD, a-raṇa)。

<sup>202</sup>「有愛」とは「生存を貪ろうとする妄執」である（『佛教語大辞典』79頁参照）。

<sup>203</sup>方広には「摧魔幢」と訳されている。

<sup>204</sup>方広には「建智幢」と訳されている。

<sup>205</sup>方広には「法身智身故」と訳されている。

<sup>206</sup>「如意宝珠」とは「意のままに願いをかなえる珠寶」であり、「如意輪観音・馬頭観音・地藏菩薩などの持物として、人々の心願を満足させるもの」とされる（『佛教語大辞典』1060頁参照）。

<sup>207</sup>諸刊本にも東大写本にも「珠」(maṇi)が挿入されているが、文脈上もチベット訳によっても削除すべきである。

<sup>208</sup>「下巻」の訳文には、不注意により「応供者」が欠落しているので補足する。

<sup>209</sup>「随法行者」(dhārmika)とは「常に善行に努める高潔な人」の意である。

<sup>210</sup>nandy-āvartaは吉祥なる図形の一つであり、「八十種好の一」とされる。nandiはヴィシュヌ神を指し、āvartaは「旋回」の意味であるから、「ヴィシュヌ神の毛髪が旋回していることを象徴する」という。『望月 佛教大辞典（増訂版）』4756頁

殺生を止めたるが故に、(踵の長大なる者)と呼ばれ、長夜にわたり、他の衆生を殺生禁断に教導せるが故に、(長き指を有する者<sup>211</sup>)と呼ばれ、長夜にわたり、殺生禁断の功德の讃辞を演説せるが故に、(身体が大きくて真直なる者<sup>212</sup>)と呼ばれ<sup>213</sup>、長夜にわたり、父母・沙門・婆羅門・師主・応供者に承事し給侍し洗浴し塗油し酥油と麻油を塗り、自らの手で<sup>214</sup> [父母等の] 身体を浄飾して疲倦することなきが故に、(手足の柔軟なる者)と呼ばれ、布施・愛語・利行・同事の [四<sup>215</sup>] 撰事の網によって衆生を撰取する善巧<sup>216</sup>に習熟せるが故に、(手足の指に網縵ある者<sup>217</sup>)と呼ばれ、長夜にわたり、次第に上位の優れたる善根を把握の対象とせるが故に、(足趺(足の甲)の隆起せる者)と呼ばれ、長夜にわたり、父母・沙門・婆羅門・師主・応供者、及び如来の塔廟を右邊し、崇敬の念を以て<sup>218</sup> 聞法しては身毛喜堅し、他の衆生を歡喜せしめる説法に専念せるが故に、(身毛は上方に向かって右旋せる者<sup>219</sup>)と呼ばれ、長夜にわたり、親切に歡待してから聞法し理解し記憶し<sup>220</sup> 誦し教示し、意味と語句の解釈とを決定する善巧によって老・病・死に直面する諸衆生に<sup>221</sup> 帰依処を与え、親切に歡待して説法し輕蔑の念を持たざるが故に、(羚羊の如き脛を有する者)と呼ばれ、長夜にわたり、沙門や婆羅門たち、またその他の同学の梵行者たちに梵行を援助するためのあらゆる資具を与え、裸体の者たちに衣服を与え、他人の妻と交わらず、梵行の功德を称揚演説し、慚と愧とを護持し<sup>222</sup>、誓約堅固なるが故に、(陰部は [腹の] 内側に隠没せる者)と呼ばれ、長夜にわたり手足 [の行動] を制御し、衆生への不傷害に専心し、慈 [心] ある身業・語業・意業に従事せるが故に、(臂が長く垂下せる者)と呼ばれ、長夜にわたり、飲食の適量を知って小食し胃腑を抑制し、病者に薬を与え、卑賤なる者を輕蔑することなく、孤独なる者を虐待することなく、壞れたる如来の塔廟を修復し仏塔を建立し、また、恐怖に怯えたる衆生に無畏 (安心) を与えたるが故に、(ニヤグローダ樹の如く [胴体が] 円満なる者<sup>223</sup>)と呼ばれ、長夜にわたり、父母・沙門・婆羅門<sup>224</sup>・師主・応供者等を洗浴し塗油し酥油と麻油を塗り、寒冷なる時には温水を、暑熱なる時には冷水と涼陰<sup>225</sup>とを、[また] 季節の安楽の資具を与え、柔軟なる綿の如く感触の快き優美なる布の敷かれたる臥具を与え、如来の塔廟に香の麻油を灌ぎかけ繊細なる絹布の旗幟と幢幡と絲縷 (飾り紐) とを奉獻せるが故に、(肌が柔軟かつ繊細なる者)と呼ばれ、長夜にわたり、一切<sup>226</sup> 衆生に恚恨を抱かず、

参照。

<sup>211</sup> チベット訳は「手の指の長者」という意味の訳文になっている。

<sup>212</sup> 「下巻」には「大衆を庇護する者」と誤記したので、「身体が大きくて真直なる者」に訂正する。

<sup>213</sup> チベット訳は「殺生禁断の功德の讃辞を演説し大衆の庇護をなせるが故に (身体が大きくて真直なる者) と呼ばれる」という意味の訳文になっている。この齟齬の発生は梵文に書写ミスがあったことによるものと思われる。

<sup>214</sup> 「自らの手で」(svahasta) は、チベット訳には「手を伸ばして」(lag dar te) と訳されている。

<sup>215</sup> チベット訳には「四」に相当する訳語 (bshi) がある。

<sup>216</sup> 「善巧」(kauśalya) とは「巧みな手段・方法」の意である。

<sup>217</sup> チベット訳は「手足 [の指] が網によって結ばれたる者」という意味の訳文になっている。

<sup>218</sup> チベット訳には「身業 (身体的行為) と崇敬の念を以て」(lus kyi las dañ gus par) と訳されている。

<sup>219</sup> チベット訳は「身毛が上方に向かって右旋して生えたる者」という意味の訳文になっている。

<sup>220</sup> チベット訳には「記憶し」(dhāraṇa) に当たる訳語はない。

<sup>221</sup> 「諸衆生に」(sattvānām) は、チベット訳には「一切衆生に」(sems can thams cad la) と訳されている。

<sup>222</sup> チベット訳は「慚を知り愧を護持し」という意味の訳文になっている。慚は「過失を恥じること」、愧は「自らを反省すること」である。

<sup>223</sup> 方広には「身如尼拘陀樹」と訳されている。

<sup>224</sup> チベット訳は「父母・婆羅門・沙門」の順となっている。

<sup>225</sup> 「涼陰」の原語は chāyātapa (熱なき陰) である。

<sup>226</sup> チベット訳には「一切」(sarva) に当たる訳語はない。

慈の修習に専念し、他の衆生を忍耐と温和に勧導し、敵意なく悪意なきことの功德を称揚演説し、如来の塔廟と如来の形像等に<sup>227</sup>金の細工物・金の花・金の香末を撒布し、金色をした絹布の幢幡と旗幟と装具（装飾品）と、金の容器と金色をした衣類とを奉獻せるが故に、〈皮膚の金色なる者〉  
 448 と呼ばれ、長夜にわたり、智者に近づきては<sup>228</sup>善および不善は何かと問訊し、罪過〔ある行為〕と罪過なき〔行為〕、実修すべきことと実修すべからざること、劣等なると中等なると優等なる法と〔何か〕を問訊し、また、その意味を吟味し思量して迷妄あることなく、如来の塔廟の蛆蟲・蜘蛛の巣と網・腐朽せる花・種々の雑草・塵埃〔等〕を<sup>229</sup>除去することに専念せるが故に、〈各々〔の毛孔〕に毛の生えたる者<sup>230</sup>〉と呼ばれ、長夜にわたり、父母・長上・尊貴・供養すべき者・沙門・婆羅門・貧窮者、及び乞食等に来至せる者たちを親切に歓待して、〔相手の〕望むとおりに食物・飲料・臥具・<sup>231</sup>衣類・枕台・灯明、及び適当なる生活資具を施与し、清涼なる水に満ちたる井戸や池を大衆の受用に供与せるが故に、〈七処隆然たる者<sup>232</sup>〉と呼ばれ、長夜にわたり、父母・沙門・婆羅門・師主・応供者に稽首し礼拝し先に挨拶し、無畏（安穩）を与え、弱者を侮蔑せず、庇護を求めて来たる者を見捨てず、堅く誓約して破棄せざるが故に、〈上半身が獅子の如き者〉と呼ばれ、長夜にわたり、自らの罪過を省みるも他者の過失や他者の瑕疵を非難することなく、口論の発端や他者との不和の原因となる言辞を回避し、呪文を完全に放棄し、語の行動（語業）をよく制御せるが故に、〈両肩間（胸）の豊満なる者<sup>233</sup>〉と呼ばれ、長夜にわたり、《父母・<sup>234</sup>沙門・婆羅門・師主・応供者<sup>235</sup>》等に対して起ち上がって出迎え先に挨拶し、また、あらゆる論書に臆することなきが故に論争したがる衆生を制止し、《自らの法の律儀に随順するように正しく向かわしめ、<sup>236</sup>王や大臣等を善法の道に導き修習せしめ、如来の教法を把握し護持し、一切の善行に教導することを第一となせるが故に、〈肩先の甚だ円満なる者〉と呼ばれ、長夜にわたり、来乞者<sup>237</sup>の所願に応じてあらゆる事物を捨施し親愛を以て語り、また、到来せる者たちを軽視せず落胆させず追い払わず、全ての者の所願どおりに満足せしめる施物を恵施<sup>238</sup>し、堅く誓約して破棄せざるが故に、〈獅子の如き  
 450 頬を有する者〉と呼ばれ、長夜にわたり、両舌<sup>239</sup>（陰口）の語を捨離し、不和をもたらず言辞を用いることなく、和合することを喜び、諸和合の分断を思念することなく、両舌を批難し和合することの功德を称揚演説することに専念せるが故に、〈四十の斉平<sup>240</sup>なる齒を有する者〉と呼ばれ、長夜にわたり、黒分（悪の部類）を捨離し、白分（善の部類）たる善を<sup>241</sup>集積し、黒き業と黒き果報

<sup>227</sup> 方広には「佛形像及以塔廟」と訳されている。

<sup>228</sup> 方広には「常親近智者」と訳されている。

<sup>229</sup> チベット訳は「塵埃があれば」という意味の訳文になっている。

<sup>230</sup> 方広には「一毛孔一毛生」と訳されている。

<sup>231</sup> チベット訳はこの箇所「薬物」(sman) を挿入している。

<sup>232</sup> 方広には「七處高」と訳されている。「七處」とは「両足・両掌・両肩・首のうしろ」である。

<sup>233</sup> 方広には「両肩平満」と訳されている。

<sup>234</sup> 「父母」(mātāpitr) は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>235</sup> 「師主・応供者」(guru-dakṣiṇīya) は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>236</sup> 〈 〉内の原文は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>237</sup> 「来乞者」とは「乞食のために来訪した者」の意である。

<sup>238</sup> 「恵施」とは「めぐみほどこすこと」「喜んで施与すること」である。

<sup>239</sup> 「両舌」(pisuna) とは「人の仲を裂くようなかけぐちを言うこと」であり、「二枚舌を弄すること」である。

<sup>240</sup> 「斉平」とは「均等にそろって並立すること」である。

<sup>241</sup> 「善を」(kuśala) は、チベット訳には「善根を」(dge baḥi rtsa ba) と訳されている。

とを<sup>242</sup>捨離し、白き業と白き果報とを<sup>243</sup>称讚し、[白き]乳酪製品や白き衣<sup>きぬ</sup>を布施し、如来の塔<sup>とうびょう</sup>廟等に牛乳を混合せる[白き]漆喰<sup>しつくい</sup>を塗り<sup>244</sup>、スマナスとヴァールシキーとダーヌスカーリン<sup>245</sup>の花で編まれた紐の花鬘<sup>はなかつら</sup>と白色の花とを贈与したるが故に、(齒の白浄なる者)と呼ばれ、長夜にわたり、嘲笑<sup>ちやうしやう</sup>や戲弄<sup>ぎろう</sup>を捨離し、歡娛<sup>かんご</sup>を造作し言辞を抑制し、歡娛を造作する言辞を語り、他者の過失や他者の瑕疵<sup>かし</sup>を探索せず、一切の衆生を平等心を以て教導し、平等に<sup>ふるま</sup>振舞い平等に説法し、堅く誓約して破棄せざるが故に、(齒の齊密<sup>せいみつ</sup><sup>246</sup>なる者)と呼ばれ、長夜にわたり、一切の衆生を苦しめず傷つけず、種々の病<sup>やまい</sup>に苦しむ者を看護し病者に薬を与え、また、[一切の<sup>247</sup>隊商人たちに一切の食味<sup>じきみ</sup>を<sup>248</sup>与えて疲倦あることなきが故に、(味中の最上味を有する者)と呼ばれ、長夜にわたり、虚偽なる・無礼なる・粗暴なる・欺瞞なる・他人を罵る・他者を呪詛する・不快なる・他者の弱点<sup>えぐ</sup>を扶[ような]言葉を捨離し、慈[心]と悲[心]とを勤修し喜[心]と愉悅とを造作し、温和なる・親愛なる・柔軟なる・心地よき・衆生の感官<sup>そうかい</sup>を爽快ならしめる[ような]正語<sup>しようご</sup>[の使用]に正しく専念せるが故に、(梵天の如き音声ある者)と呼ばれ、長夜にわたり、一切衆生に恚恨あることなき眼<sup>まなこ</sup>をそそぐこと父母に対するが如く、慈と悲とを第一として乞人<sup>こつじん</sup>を顧慮し落胆させざること[自分の]一人子<sup>ひとりこ</sup>に対するが如く、清浄なる感官を以て如来の塔廟を瞬きもせずに瞻観し、他の衆生を如来の觀察<sup>かんざつ</sup>に教導し、堅く誓約せるが故に、(瞳の紺青なる者<sup>249</sup>)と呼ばれ、長夜にわたり、《低劣なる意思<sup>250</sup>や劣小なる心念<sup>250</sup>を放棄し、高大にして広博なる信解<sup>251</sup>を満溢ならしめ、無上の法を願樂<sup>252</sup>するように衆生を教導し、眉をしかめたる顔を見せることなく笑顔<sup>251</sup>を以て一切の善友の近くに<sup>252</sup>行き対面することを第一と心がけ、一切の善根を増進して退転せざるが故に、(睫毛が牛の如き者)と呼ばれ、長夜にわたり、一切の悪口を捨離し、あらゆる声聞や独覚や法師<sup>253</sup>の功德の無量なる讚辞を演説し、如来の經典を書写し誦誦し朗誦し教示し、また、それらの法の意味と語句とを分析して他の衆生に理解させることに善巧なるが故に、(舌の広長なる者<sup>254</sup>)と呼ばれ、長夜にわたり、父母・沙門・婆羅門・師主・応供者の足下に頭面をつけて平伏し、出家者に敬礼し先に挨拶し髪を剃除してやり頭上に香油を塗り、一切の来乞者に対して香末・花環・花鬘・頭嚴具<sup>253</sup>を与えたるが故に、(頭頂に肉髻ありて頭頂を見ることを得ざる者)と呼ばれ、長夜にわたり、あらゆる無遮

<sup>242</sup>チベット訳は「業が黒くして果報もまた黒きを」という意味の訳文になっている。

<sup>243</sup>チベット訳は「業が白くして果報もまた白きを」という意味の訳文になっている。

<sup>244</sup>チベット訳は「漆喰を刷毛で塗り」という意味の訳文になっている。

<sup>245</sup>これらの花の原語は順次 *sumanas*, *vārṣiki*, *dhānuskārin* である。チベット訳には *su ma na, bār śi ka, dha nu ska ri* と音訳されている。

<sup>246</sup>「齊密」とは「均一に並んで隙間がないこと」である。

<sup>247</sup>チベット訳には「一切の」(*sarva*)に当たる訳語が見当たらないから削除すべきか？

<sup>248</sup>チベット訳は「一切の最上味を」という意味の訳文になっている。

<sup>249</sup>方広には「眼青紺色」と訳されている。

<sup>250</sup>「低劣なる意思」(*hinamati*)は、諸刊本にも東大写本にも欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>251</sup>「信解」(*adhimukti*)とは「教えを信じ、理解して進んで向上しようとする意欲」である(『佛教語大辞典』776頁参照)。

<sup>252</sup>「願樂」(*chanda*)とは「ねがいこのむこと」である。

<sup>253</sup>「法師」(*dharmabhāṅaka*)とは「教えを説く人：説法者」の意であるが、特に「大乘經典の受持・誦誦・解説・書写等に精励する布教師」を指す。「ほっし」とも読む。

<sup>254</sup>方広には「舌廣大」と訳されている。



454 会の祭式<sup>255</sup>を設け、《一切衆生を善に向けて<sup>256</sup>》教導し、[一切の<sup>257</sup>]善友からの教誡に違背せず、法師に派遣されて諸方に往來して倦怠あることなく、一切の仏陀・菩薩・独覺・聖声聞（仏弟子）・法師<sup>258</sup>・父母・師主・応供者に《奉仕するために<sup>259</sup>》種々なる香気の胡麻油・酥油・[菓の]炬火・灯明等により黒闇を滅除し、如来の像にあらゆる最勝相を具有せしめて端嚴ならしめ、白乳の如き[白き]宝石の<sup>260</sup>毫相を以て瑩飾し、他の衆生に菩提心を生起せしめ善の積集に卓越せるが故に、〈眉間の[白く]毫は美麗にして右に旋回し赫奕として<sup>261</sup>清浄なる色の光明を有する者〉と呼ばれ<sup>262</sup>、大那羅延力を有するが故に、〈大勢力を有する者<sup>263</sup>〉と呼ばれ、百拘胝ものマール（悪魔）を鎮圧する力を有するが故に、〈大那羅延<sup>264</sup>〉と呼ばれ、《如来の十力を有するが故に、<sup>265</sup>》〈一切の外道異論を摧伏する者〉と呼ばれ、是処・非処<sup>266</sup>（道理と非理）の弁別に熟通し、劣等にして狭小なる乘（小乗）を捨離して大乘の徳を修集する力を具足し、その力を勤修することに厭足せざるが故に、〈如来の十力を有する者〉と呼ばれ、過去・未来・現在に[各自が]引き受ける業を因と果に応じて弁別する力<sup>267</sup>を有するが故に、〈是処・非処を弁別する力を有する者<sup>268</sup>〉と呼ばれ、一切衆生の感官と精進との種々差別を弁別する力を有するが故に、〈過去・未来・現在に[各自が]引き受ける業の因と果を弁別する力を有する者〉と呼ばれ、無数の要素・種々なる要素から成る世界に趣入する智力を有するが故に、〈一切衆生の感官と精進との種々差別を弁別する力を有する者〉と呼ばれ、無数の信解・種々なる信解・無余なる<sup>269</sup>（完全なる）信解・解脱を弁別する力を有するが故に、《（無数の要素・種々なる要素から成る世界に趣入する智力を有する者）と呼ばれ、<sup>270</sup>》一切処に至る行法の智力を有するが故に、〈無数の信解・[種々なる信解・<sup>271</sup>]一切の無余なる信解《解脱<sup>272</sup>》を弁別する力を有する者〉と呼ばれ、禪定・解脱・三昧・等至<sup>273</sup>の雑染（汚すもの）と浄化と安立<sup>274</sup>との一切を弁別する力を有するが故に、〈一切処に至る行法の智力を有する者〉と呼ばれ、無数の種類の

<sup>255</sup>「無遮会」とは「国王が施主となり、国内の僧尼貴賤一切の人びとを制限（遮）することなく供養し、布施する大会をいい、五年に一回行なったから五年大会ともいう」（『佛教語大辞典』1327頁参照）。

<sup>256</sup>〈 〉内の原文は諸刊本及び諸写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>257</sup>「一切の」(sarva) は諸刊本及び諸写本に挿入されているが、文脈上もチベット訳によっても削除すべきである。

<sup>258</sup>チベット訳には「法師」(dharmabhāṅaka) に当たる訳語はない。

<sup>259</sup>「奉仕するために」(upasthānāya) は全写本に欠落しているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。なお、[下巻]にはこの欠落についての指摘が漏れているので補足する。

<sup>260</sup>チベット訳には「宝石の」(ratna) に当たる訳語はない。

<sup>261</sup>チベット訳には「赫奕として」(uttapta) に当たる訳語はない。

<sup>262</sup>以上、「足下平安なる者」から始まる「三十二大人相の由来たる善根を説明する部分」は、三十二相の一つである「身不婁曲」(anavanata-kāya) を欠落しているために、三十一相しかない。

<sup>263</sup>方広には「得大勢」と訳されている。

<sup>264</sup>「大那羅延」(mahānārāyaṇa) は、チベット訳では「大那羅延力を有する者」という意味の訳文になっている。

<sup>265</sup>〈 〉内の原文は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。なお、[下巻]にはこの欠落についての指摘が漏れているので補足する。

<sup>266</sup>「是處非處力」とは「是・非の理を分別する力」であり、「如来の十力の一つ」とされる（『佛教語大辞典』822頁参照）。

<sup>267</sup>チベット訳は「引き受ける業の原因と果報を弁別する力」という意味の訳文になっている。

<sup>268</sup>チベット訳は「弁別することに熟通し、劣等にして狭小なる乗を捨離し、大乘の徳を修集する力を具足して、[その]力を勤修することに厭足せざる者」という意味の訳文になっているが、これは勘違いによる誤訳と思われる。

<sup>269</sup>「無余なる」とは「余すところなく」「悉く」「完全なる」の意である。

<sup>270</sup>〈 〉内の原文は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>271</sup>「種々なる信解」(nānādhimukti) は幾つかの写本に欠落しており、チベット訳でもこれを略している版本が多い。

<sup>272</sup>「解脱」(vimukti) は諸刊本及び諸写本に欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>273</sup>「等至」とは「身心平等にして平安なる境地」である。

<sup>274</sup>「安立」とは「安定した状態で持続すること」である。

宿世<sup>275</sup>を想起する<sup>275</sup>障礙なき智力を有するが故に、〈禪定・解脱・三昧・等至の雑染と《浄化と<sup>276</sup>》安立との一切を弁別する力を有する者〉と呼ばれ、一切の無余なる色<sup>しき</sup>（物質現象）を蓋障なく観ずる天眼の智力を有するが故に、〈無数の種類の宿世を想起する障礙なき智力を有する者〉と呼ばれ、習気<sup>じっけ</sup>（業の潜在余力）の相統<sup>そうとく</sup>の一切の発動とあらゆる漏泄<sup>ろうせつ</sup>（煩惱の流出）の無余なる滅尽<sup>めつじん</sup>とを弁別する力を有するが故に、〈一切の無余なる色を蓋障なく観ずる天眼の智力を有する者〉と呼ばれ、  
456 「一切の法を悉く現等覚せん」との立誓<sup>りつせい</sup><sup>277</sup>が天界を含む [全] 世界において妨げられることなき誓言<sup>せいごん</sup>の無畏を得たるが故に、〈習気の相統<sup>そうとく</sup>の一切の発動とあらゆる漏泄<sup>ろうせつ</sup>の無余なる滅尽<sup>めつじん</sup>とを弁別する力を有する者〉と呼ばれ、「一切の雑染なる障道法<sup>しょうどうほう</sup><sup>278</sup>は涅槃の妨害を為す」との、それなる立誓が天界を含む [全] 世界において<sup>279</sup>妨げられることなき誓言の無畏を得たるが故に、〈一切の法を悉く現等覚せん〉との立誓が天界を含む [全] 世界において妨げられることなき誓言の無畏を得たる者〉と呼ばれ、「出離<sup>しゅつり</sup>（解脱）に至る正行を勤修して涅槃に達すべし」との立誓が、天界を含む [全] 世界において撤回せしめられることなき誓言の無畏を得たるが故に、〈一切の雑染なる障道法は涅槃の妨害を為す〉との<sup>280</sup>、それなる立誓が天界を含む [全] 世界において断滅せられることなき誓言の無畏を得たる者〉と呼ばれ、「一切の漏泄を [尽滅する智<sup>じんめつ</sup><sup>281</sup>] 《断滅する智を得ん》との<sup>282</sup> 立誓が、天界を含む [全] 世界において退転せしめられることなき誓言の無畏を得たるが故に、〈出離（解脱）に至る正行を勤修して涅槃に達すべし〉との立誓が天界を含む [全] 世界において撤回せしめられることなき誓言の無畏を得たる者〉と呼ばれ、誤謬なき語句を以て法を説くが故に、〈一切の漏泄を [尽滅する智<sup>じんめつ</sup><sup>283</sup>] 断滅する智を得ん〉との立誓が天界を含む [全] 世界において退転せしめられることなき誓言の無畏を得たる者〉と呼ばれ、音声なき不可説なる法の自性を覚知せるが  
458 故に、〈誤謬なき語句を以て法を説く者〉と呼ばれ、[説法を] 中断することなきが故に、〈音声なき不可説なる法の自性を覚知せる者〉と呼ばれ、一切衆生の無量なる音声を仏法の言音に神変せしめうるが故に、〈[説法を] 中断することなき者〉と呼ばれ、失念あることなきが故に、〈一切衆生の無量なる音声を仏法の言音に神変せしめうる者〉と呼ばれ、種々なる妄想を滅除せるが故に、〈失念あることなき者〉と呼ばれ、一切《衆生》の《禪定》<sup>284</sup>心よりも勝れたる禪定を有するが故に、〈種々なる妄想を滅除せる者〉と呼ばれ、思擇<sup>しちやく</sup><sup>285</sup>によらざる（無為自然なる）捨心（平静なる心）を有するが故に、〈一切《衆生》<sup>286</sup>の禪定よりも勝れたる禪定を有する者〉と呼ばれ、欲行の [無常

<sup>275</sup> チベット訳には「想起する」(anusmṛti) に相当する訳語がないが、これは不注意による見落としと思われる。

<sup>276</sup> 「浄化」(vyavadāna) は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>277</sup> 「立誓」(pratijñārohaṇa) とは「誓い(誓言)を立てること」である。

<sup>278</sup> 「障道法」(antarāyika-dharma) とは「さとりを求める修道の障害となるもの。すなわち妄語・淫欲のようなものである(『佛教語大辞典』730頁参照)。「下巻」には「障害の法」と訳したが、「障道法」に訂正する。

<sup>279</sup> チベット訳は「世界によって」という意味の訳文になっているが、文脈上、上述に合わせて「世界において」と訳した。以下、同様である。

<sup>280</sup> チベット訳は「涅槃の障害となる一切の雑染の法を顕示して」という意味の訳文になっている。

<sup>281</sup> [ ] 中の原文 (kṣaya-jñāna) は東大主要写本に挿入されているが、文脈上もチベット訳によっても削除すべきである。

<sup>282</sup> < > 中の原文 (prahāṇa-jñāna) は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>283</sup> [ ] 中の原文 (kṣaya-jñāna) は写本 T1, T4, N3, N4等に挿入されており、レフマン校訂本にも挿入されているが、上註281と同様に削除すべきである。

<sup>284</sup> 「衆生」と「禪定」に当たるところの原文は東大主要写本には欠落しているが、文脈上もチベット訳によっても挿入すべきである。

<sup>285</sup> 「思擇」(pratisamkhyā) とは「深く思念すること」「熟考すること」である。方広には「非擇滅捨」と訳されている。

<sup>286</sup> 「衆生」(sattva) は東大主要写本には欠落しているが、文脈上挿入すべきである。

なることを観ずる]三昧を断失<sup>287</sup>することなきが故に、〈思擇によらざる捨心を有する者〉と呼ばれ、精進行の三昧より離絶せず精進を断失することなきが故に<sup>288</sup>、〈欲行の[無常を観ずる]三昧を断失することなき者〉と呼ばれ、正念を断失することなきが故に、〈【精進行の三昧[より離絶せず]<sup>289</sup>】精進を断失することなき者〉と呼ばれ、智慧を断失することなきが故に、〈正念を断失することなき者〉と呼ばれ、解脱を断失することなきが故に、〈智慧を断失することなき者〉と呼ばれ、解脱の智見を断失することなきが故に、〈解脱を断失することなき者〉と呼ばれ、一切の身業・語業・意業の前に智を先行せしめ智の随轉《する智》を有する<sup>290</sup>が故に<sup>291</sup>、〈解脱の智見を断失することなき者〉と呼ばれ、過去・未来・現在の世において無滯無礙なる智見を有するが故に<sup>292</sup>、〈一切の身・語・意業の前に<sup>293</sup>智を先行せしめ智の随轉する智を有する者〉と呼ばれ、蓋障なき解脱を獲得せるが故に、〈三世において無滯無礙なる智見を有する者〉と呼ばれ、〔加護する<sup>294</sup>〕一切衆生の行業に趣入する善巧に止住するが故に<sup>295</sup>、〈蓋障なき解脱を獲得せる者〉と呼ばれ、各個の機根（資質）に依じて説法することに善巧なるが故に、〔加護する<sup>296</sup>〕一切衆生の行業に趣入する善巧に止住する者<sup>297</sup>と呼ばれ、一切の音声支分の領域において至高の彼岸に達したるが故に、〈各個の機根に依じて説法することに善巧なる者〉と呼ばれ<sup>298</sup>、一切の言音に対して応答する善巧を逮得<sup>299</sup>せるが故に、〈一切の音声支分の領域において至高の彼岸に達したる者<sup>300</sup>〉と呼ばれ、〈天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅（金翅鳥）・緊那羅・摩睺羅迦《の音声<sup>301</sup>》を有する者<sup>302</sup>〉と呼ばれ、〈梵天の音声鳴響の如き〔声を有する〕者〉と呼ばれ、〈カラヴィンカ鳥の囀るが如き〔声を有する〕者<sup>303</sup>〉と呼ばれ、〈太鼓と伎楽の音声の如き〔声を有する〕者〉と呼ばれ、〈地震音の音響の如き〔声を有する〕者〉と呼ばれ、〈サーガラ竜王が吼える雷鳴の音声の如き〔声を有する〕者<sup>304</sup>〉と呼ばれ、〈獅子か牛王の咆哮する音声の如き〔声を有する〕者〉と呼ばれ、〈一切衆生の音声の響きに相應する反響によって満悦せしめる者〉と呼ばれ、〈衆会を悦樂せしめる無障無礙なる音声を有する者<sup>305</sup>〉と呼ばれ、〈一

<sup>287</sup> 方広には「名欲行三昧不断」と訳されている。

<sup>288</sup> 方広には「名精進不退」と訳されている。

<sup>289</sup> チベット訳には「精進行の三昧」(viryaṣaṃskārasamādhi)に相当する訳語はない。

<sup>290</sup> 梵語原文によれば「智の随轉を有する」と訳すべきであるが、チベット訳には「智の随轉する智を有する」(ye śes kyi rjes su ḥbrañ baḥi ye śes dañ ldan pa)と訳されている。

<sup>291</sup> 方広には「名從智出一切身語意業隨智慧行」と訳されている。

<sup>292</sup> 方広には「名過現未來智障無礙」と訳されている。

<sup>293</sup> チベット訳は「一切の身業・語業・意業の前に」という意味の訳文になっている。

<sup>294</sup> 「加護する」(adhiṣṭhita)は全写本に挿入されているが、チベット訳にも方広にも相当訳語がなく、文脈上も不要であるから削除すべきである。

<sup>295</sup> チベット訳は「一切衆生の行業に趣入する善巧を離絶することなきが故に」という意味の訳文になっている。方広には「名善入衆生之行」と訳されている。

<sup>296</sup> 上註294に同じ。

<sup>297</sup> チベット訳は「善巧を離絶することなき者」という意味の訳文になっている。

<sup>298</sup> 方広には「名如應説法」と訳されている。

<sup>299</sup> 「逮得」とは「完全に得ること」である。

<sup>300</sup> 方広には「名善能超過一切音聲相彼岸」と訳されている。

<sup>301</sup> 東大主要写本には「音声」(ruta)が欠落しているが、文脈上必要である。

<sup>302</sup> 方広には「名善對答一切異類音聲」と訳されている。

<sup>303</sup> 方広には「名迦陵頻伽聲」と訳されている。

<sup>304</sup> 方広には「名大海王聲。名大龍王聲」と訳されているが、「大海王」と「大龍王」のどちらもサーガラ竜王の訳語と思われる。

<sup>305</sup> 方広には「名無著無礙令諸衆會生歡喜心」と訳されている。

音にて一切音を理解せしめる音声を有する者)と呼ばれ、(梵天王に供養せられる者)と呼ばれ、(天王(インドラ)<sup>306</sup>に恭敬せられる者)と呼ばれ、(竜王に帰命せられる者)と呼ばれ、(夜叉王に顔を瞻仰<sup>307</sup>せられる者)と呼ばれ、(乾闥婆王に奏樂を捧げられる者)と呼ばれ、(羅刹王に諸根清浄なる眼を以て瞬きもせず凝視せられる者)と呼ばれ、(阿修羅王に頂礼せられる者)と呼ばれ、(迦樓羅王に詠嘆せられる者)と呼ばれ、(摩睺羅迦王に觀見<sup>308</sup>を切望せられる者)と呼ばれ、(人間の王に丁重に供養せられる者)と呼ばれ、(阿羅漢の群衆に親近<sup>309</sup>せられる者<sup>310</sup>)と呼ばれ、(一切の菩薩を教導し激励し欣喜せしめる者<sup>311</sup>)と呼ばれ、(報酬なくして説法する者<sup>312</sup>)と呼ばれ、(字句言音に誤りなく有益なる説法を為す者)と呼ばれ、(時機を逸することなく説法する者)と呼ばれ、  
462 彌勒よ、【まさに<sup>313</sup>】これなる転法輪は、如来の功德讚歎の一部を、ただ思いつく限りにおいて簡潔に述べたるのみにして、彌勒よ、詳細に説かば、如来は、一劫あるいは一劫を過ぐるとも、この演説の辺際<sup>314</sup>に達することなからん。

また、《実に<sup>314</sup>》その時、世尊は、かくの如き偈を説きたまえり。

52. 甚深にして難見かつ微妙なる法輪が転ぜられたり。  
一切の外道異学もマーラ(悪魔)も、そこに通達することなし。
53. 依處なく、戲論なく、不生にして不可得なる、  
寂靜にして自性空なる法輪が転ぜられたり。
54. 無取にして無捨なる<sup>315</sup>、無因にして無相なる、  
平等性なる法を説く[法]輪が、仏陀によって転ぜられたり。
55. 幻、陽炎、夢、谷響、水中の月、それらの如くなる、  
その<sup>316</sup>[法]輪が、世間の導師(仏陀)によって転ぜられたり。
56. 縁起の<sup>317</sup>法に入らしめ、断滅せず、常恒ならず、  
一切の邪見を根絶する法輪なりと呼ばれたり。
57. 常に虚空の如くにして、虚妄分別なく、明淨にして、  
辺際も中間も無しと説く法輪なりと、ここに名づけられたり。
58. 有と無と[の両端]から離れ、我と非我<sup>318</sup>と[の両端]を捨て、  
本来不生なる[法]を説く法輪なりと、ここに名づけられたり。
- 464 59. 眞実の辺際にして辺際あることなく、眞如のなかにおける眞如なる、

<sup>306</sup>「下巻」には「[四大]天王」と訳したが、誤訳と思われるので「天王(インドラ)」に訂正する。

<sup>307</sup>「瞻仰」とは「尊び仰ぎ見ること」である。

<sup>308</sup>「觀見」とは「姿を見ること」である。

<sup>309</sup>「親近」とは「近くにいて親しみ仕えること」である。方広には「承事」と訳されている。

<sup>310</sup>方広には「名聲聲衆之所承事」と訳されている。

<sup>311</sup>方広には「名菩薩衆之所恭敬讚歎」と訳されている。

<sup>312</sup>方広には「名無輪求説法」と訳されている。

<sup>313</sup>「まさに」の原語は tan(= tat) であるが、チベット訳には相当訳語がなく、文脈上も不要であるから、削除すべきであると思われる。

<sup>314</sup>「実に」(khalu) は東大主要写本には欠落している。

<sup>315</sup>方広には「不出亦不入」と訳されている。

<sup>316</sup>チベット訳には「その」(tad) に当たる訳語はない。

<sup>317</sup>「下巻」には「縁生の」と訳したが、「縁起の」に訂正する。

<sup>318</sup>「非我」の原語は nairātmya (一般には「無我」の意) である。仏教は無我説を説くものであるから、この nairātmya は敢えて「非我」と訳した。

- 不二（絶対平等）なる法を説く法輪なりと宣言せられたり。
60. 眼は自性として空なり。鼻も耳もまた、まさに同様なり。  
舌も身も意もまた、空を本性とし、無作（意志なきもの）なり。
61. かくの如き、この〔空性なる〕輪こそ法輪なりと呼ばれたり。  
無知なる衆生を覚らしめる、それ故に覚者（仏陀）なりと言明せられたり。
62. この法の相（特徴）なる自性は、他〔者〕より教示せられたるものに非ずして、  
おのれ自ら覚知せるものなり。それ故に〔われは〕自存者にして具眼者なり。
63. 一切の法に自在を得たるが故に、〔われは〕法王と称えられ、  
諸法における理と非理とを知る、それ故に導師と呼ばれる。
64. 教化に应じうるところの、無量の衆生を教化し、  
教化の彼岸に達したり。それ故に教導者と呼称せられる。
65. 道に迷えるところの衆生、その者たちに、最上なる道を説示し、  
彼方の岸へと引導する。それ故に、われは教導者なり。
66. 〔四〕撰事<sup>319</sup>の正智により、われは衆生を攝受して、  
輪廻の曠野を渡るが故に、それ故に、われは隊商主なり。
67. 〔われは〕一切の法に自在なり、それ故に、法を支配する勝者にして、  
法輪を転ずるが故に、法の王なりと称揚せられる。
68. 〔われは〕法の施主なる教師にして、無上なる法の統治者なり。  
適宜に祭式を祀りて、目的を成就し、願望を満足し、吉祥事を成就せり。
- 466 69. 慰安を与え、安穩を示し、大煩惱を除く勇者にして、  
一切の戦闘を過ぎ越えて〔自ら〕解脱し、衆生を解脱せしめる者なり。
70. 智慧と正智との光明を放ち、世間の燈明となり、  
無知の暗黒を破る者、炬火を持てる大光明者なり。
71. 博識の名医にして、大<sup>320</sup>煩惱の病を治す者、  
煩惱に突き刺されたる衆生にとっての無上の外科医なり。
72. 一切の身相（三十二相）を具足し、あらゆる随好相に飾られ、<sup>321</sup>  
身体はあまねく美麗なりて、卑俗なる者たちにも随順する者なり。
73. 十方による強大なる力勢を有し、〔四〕無所畏の故に怖畏あることなく、  
十八不共〔仏法〕を有するが故に、最上乘（大乘）の大牟尼なり。
74. 〔ここに〕法輪が転ぜられたるも、これは簡略に説けるのみなり。  
如来の功德を讃歎せるも、これは、わずかばかりを顕示せるなり。
75. 仏陀の智には辺際あることなく、実に広大なる虚空に等しきが故に、  
〔一〕劫を尽くして語ろうとも、〔讃歎すべき〕仏陀の功德の尽きることなし、と。

〔以上〕「転法輪品」と名づける第26章なり。

<sup>319</sup>「四撰事」については第19巻第1号所載の拙訳（註79）を参照されたい。

<sup>320</sup>チベット訳には「大」(mahā)に当たる訳語はない。

<sup>321</sup>この一行は方広には「有三十二相。具八十種好」と訳されている。

## 第27章 (終結品)<sup>322</sup>

468 実にまた、この法門の演説を、如来に対して勸請せるところの、イーシュヴァラ、マヘーシュヴァラ、ナンダ、スナンダ、チャンダナ、マヒタ、シャーンタ、プラシャーンタ、ヴィニーテーシュヴァラ<sup>323</sup>を初めとする、浄居天に属する一万八千の天子たち、彼らは、如来が法輪を転じたまえる時にも来集して[そこに]ありき。その時、世尊は、彼らマヘーシュヴァラを上首とする浄居天に属する天子たちに告げたり。「諸君、【まさに<sup>324</sup>】このラリタヴィスタラと名づける、菩薩の遊戯にして仏陀の境界に優雅に入る、大方広なる法門の<sup>325</sup>經典は、如来によって、自らを例示として説かれたり。汝らはそれを受持し、憶持<sup>326</sup>し、また、誦誦せよ。<sup>327</sup>かくすれば【わが<sup>328</sup>】この法眼は増広すべし。また<sup>329</sup>、菩薩乗の[志向者たる]者たちが<sup>330</sup>、この法門を聴くならば、無上正等覚に対する、いっそう堅固なる精進を開始すべし。また、信解の高大なる衆生たちは、法雨の大奔流を發出せしむべし。また、マーラ(悪魔)の朋党は摧伏せらるべし。また、一切の外道異学は付け入る隙を得ざるべし。また、汝らが説法を勸請せるところの、その<sup>331</sup>善根は大利益と大果報と大福利とを生ずべし。

諸君、誰かある者が、このラリタヴィスタラの法門に対して合掌をなすならば、その者は八種の優れたる徳<sup>332</sup>を獲得すべし。八種[の徳]とは何か。すなわち、次の如し。優れたる容色を獲得すべし。優れたる力を獲得すべし。優れたる侍者を獲得すべし。優れたる弁才を獲得すべし。優れたる出離<sup>333</sup>を獲得すべし。優れたる浄心を獲得すべし。優れたる三昧成就を獲得すべし。優れたる智慧光を獲得すべし。これら、八種の優れたる徳を獲得すべし。

470 また<sup>334</sup>諸君、誰かある者が、このラリタヴィスタラなる法門を演説せんと欲する法師のために、法座を設けるならば、座が設けられると同時に、その者には、八種の座の獲得が期待せらるべし。八種[の座]とは何か。すなわち、次の如し。長者の座の獲得、家長の座の獲得、転輪聖王の座の獲得、護世[四大天]王の座の獲得<sup>335</sup>、[天主]帝釈の座の獲得、[他化]自在天王の座の獲得、梵

<sup>322</sup> 方広には「屬累品」と訳されている。なお、方広には「転法輪品」と「屬累品」との間に「転法輪之二」という章が挿入されており、他の仏伝文献にも見られる「初転法輪後の遊行化導(三迦葉の帰仏、王舎城での頻王化導、舍利弗・目連の仏教入団、迦毘羅城帰国と釈迦族教化など)の物語が記されている。この挿入部分は普曜にもあるが、梵語原文は無いので、漢訳者が他の仏伝文献を模して増補付加したものと思われる。

<sup>323</sup> これらの天子名の原語は前から順次 *īśvara*, *maheśvara*, *nanda*, *sunanda*, *candana*, *mahita*, *śānta*, *praśānta*, *vinīteśvara* である。これらの天子たちは第一章にも2回登場するが、そこではいずれも、最後の3名が *praśānta*, *praśāntavinīteśvara* という2名にまとめられている。

<sup>324</sup> この「まさに」の原語は *sa* であるが、チベット訳にはこれに当たる訳語はない。

<sup>325</sup> チベット訳には「法門の」(*dharmaparyāya*) に当たる訳語はない。

<sup>326</sup> 「下巻」には「憶持」と誤記したので、「憶持」に訂正する。

<sup>327</sup> チベット訳には、この箇所「眷属にも詳細に説示せよ」(*ḥkhor la yañ rgya cher rab tu ston cig*) が追加されている。

<sup>328</sup> チベット訳には「わが」に相当する訳語 (*ñahi*) がある。

<sup>329</sup> チベット訳には「また」(*ca*) に当たる訳語はない。

<sup>330</sup> 方広には「菩薩乗人」と訳されている。

<sup>331</sup> チベット訳には「その」(*tad*) に当たる訳語はない。

<sup>332</sup> この「徳」の原語は *dharma* (法) であるが、ここでは文脈上、あえて「徳」と訳した。方広には「功德」と訳されている。

<sup>333</sup> 「出離」とは、この場合「世俗から離れること」を意味する。方広には「出家殊勝」との訳文が見られる。

<sup>334</sup> チベット訳には「また」(*ca*) に当たる訳語はない。

<sup>335</sup> チベット訳には「護世王の座の獲得」に当たる訳語がない。これがあると合計で九種の座となり、文脈上矛盾するが、これに当たる原文 (*lokapālāsanapratilambhaḥ*) が全写本に挿入されている。

天の座の獲得、無上の極致なる菩提道場に達したる菩薩《に成りし者》の、不退転にして、怨敵マール（悪魔）を降伏する獅子座の獲得、また、無上正等覚を証得してから、さらに無上の法輪を転ずる座の獲得が期待せらるべし。これら八種の座の獲得が期待せらるべし。

また<sup>336</sup>諸君、誰かある者が、このラリタヴィスタラなる法門を演説する法師に対して、「善哉」との讃辞を与えるならば、その者は八種の清浄なる語《業<sup>337</sup>》を獲得すべし。八種〔の語業〕とは何か。すなわち、次の如し。真実に随順する清浄なる語業の故に、言葉と行動が一致すること。大衆を凌駕するが故に、言葉が〔大衆に〕信受せられること。無視されることなきが故に、言葉が受容せられること。粗暴ならずして衆生を摂受するが故に<sup>338</sup>、言葉が柔軟にして甘美なること。〔聴聞者の〕身心を悦楽せしめるが故に、音声カラヴィンカ鳥の囀りの如くなること。【衆生を摂受するが故に、言葉が甘美なること。<sup>339</sup>】あらゆる音声を凌駕せるが故に、音声梵天の如くなること。一切の外道異学に凌駕せられることなきが故に、音声獅子の咆哮の如くなること<sup>340</sup>。一切衆生の感官を満足せしめるが故に、音声仏陀の如くなること。これら八種の清浄なる語業を獲得すべし。

また<sup>341</sup>諸君、誰かある者が、このラリタヴィスタラなる法門を書写して保持し、<sup>342</sup>恭敬し、尊重し、尊敬し、供養して、慳吝ならざる心を以て、この法門の称讃を四方に宣説し、〔また〕「来たれ、この法門を書写し、保持し、読誦し、思量し、暗誦せよ」と、名声を広めるならば<sup>343</sup>、その者は八種の大宝蔵を獲得すべし。八種〔の宝蔵〕とは何か。すなわち、忘失することなきが故に、正念の宝蔵を〔獲得すべし〕。覚知（理性）によって分別するが故に、英智の宝蔵を〔獲得すべし〕。一切の經典の意義を理解するが故に、理知の宝蔵<sup>344</sup>を〔獲得すべし〕。あらゆる所聞（知識）をよく憶持するが故に、陀羅尼の宝蔵を〔獲得すべし〕。よく解説して一切衆生を満足せしめるが故に、弁才の宝蔵を【獲得すべし<sup>345</sup>】。正法を遵守するが故に、法の宝蔵を【獲得すべし<sup>346</sup>】。三宝（仏・法・僧）の系譜を断切せざるが故に、菩提心の宝蔵を〔獲得すべし〕。また<sup>347</sup>、無生法忍（無生の理を悟った心の安らぎ）を得るが故に、正行（修行の成就）の宝蔵を〔獲得すべし〕。これら八種の宝蔵<sup>348</sup>を獲得すべし。

474 また<sup>349</sup>諸君、誰かある者が、このラリタヴィスタラなる法門をよく普及せしめて、保持するならば、その者は八種の資糧（修道の基本となる善根・功德）を成満すべし。八種〔の資糧〕とは何か。すなわち、吝嗇の心なきが故に、布施の資糧を成満すべし。一切の賢善なる意願を成就するが故に、持戒の資糧を成満すべし。無礙なる智慧を完成するが故に、所聞（知識）の資糧を成満すべし。一

<sup>336</sup>チベット訳には「また」(ca)に当たる訳語はない。

<sup>337</sup>「業」(karma)は全写本に欠けているが、文脈上、チベット訳を参考に挿入すべきである。

<sup>338</sup>チベット訳は単に「粗暴ならざるが故に」という意味の訳文になっており、「衆生を摂受する」に当たる訳文は欠けている。

<sup>339</sup>【 】内の部分については諸写本の原文に混乱が見られる。チベット訳にもこれに相当する訳文があるが、これを入れると九種になり、文脈上矛盾する。文意としても内容が第四番目と重複するので削除すべきであると思われる。

<sup>340</sup>方広には「聲如殷雷」と訳されている。「殷雷」とは「盛んに轟く雷鳴」の意である。

<sup>341</sup>チベット訳には「また」(ca)に当たる訳語はない。

<sup>342</sup>チベット訳にはこの個所に「読誦し」(klog gam)が挿入されている。

<sup>343</sup>チベット訳は「普及させるならば」という意味の訳文になっている。

<sup>344</sup>「理知の宝蔵」(gati-nidhāna)は、方広には「智蔵」と訳されているが、普曜には「往来蔵」と訳されている。

<sup>345</sup>チベット訳には「獲得すべし」(pratilabhate)に当たる訳語はない。

<sup>346</sup>上註345に同じ。

<sup>347</sup>チベット訳には「また」(ca)に当たる訳語はない。

<sup>348</sup>「宝蔵」のチベット訳は「大宝蔵」という意味の訳文になっている。

<sup>349</sup>上註347に同じ。

一切の三昧（深い瞑想）と等至（身心平等にして平安なる境地）とを会得するが故に、寂止（精神集中）の資糧を成満すべし。三明（宿命通・天眼通・漏尽通）の知識を円満具足するが故に、勝観（実相観察）の資糧を成満すべし。諸相隨好（三十二相と八十隨好）と仏国土の莊嚴とを淨化するが故に、福德の資糧を成満すべし。一切の衆生を各々の信解に応じて満足せしめるが故に、智見の資糧を成満すべし。【また<sup>350</sup>】一切の衆生を成熟せしめること（衆生教化）に懈怠あることなきが故に、大悲の資糧を成満すべし。これら八種の資糧を成満すべし。

また<sup>351</sup>諸君、誰かある者が、次の如く考えて、すなわち「如何にすれば、これらの衆生が、かかる種類の、この法を体得するに至らんや」と[考え]て、このラリタヴィスタラなる法門を他の者たちに詳細に解説するならば、その者は、この善根によって八種の大功德<sup>352</sup>を獲得すべし。八種[の功德]とは何か。すなわち、次の如し。轉輪聖王に成ることを得べし、これが第一の《大<sup>353</sup>》功德なり。四大天王に属する諸天（四天王）の座に即位すべし、これが第二の大功德なり。天主帝釈（インドラ天）に成ることを得べし、これが第三の大功德なり。スヤーマ<sup>354</sup>天子（夜摩天王）に成ることを得べし、これが第四の大功德なり。サントウシタ<sup>355</sup>天子（兜率天王）に成ることを得べし、これが第五の大功德なり。スニルミタ<sup>356</sup>天子（化樂天王）に成ることを得べし、これが第六の大功德なり。他化自在天王に成ることを得べし、これが第七の大功德なり。【また<sup>357</sup>】大梵天の梵王に成ることを得べし、これが第八の大功德なり。そして最後には、一切の不善なる法を捨断して一切の善法を具足せる如来・阿羅漢・正等覺[者]に成ることを得べし。これら八種の大功德を獲得すべし。

また<sup>358</sup>諸君、誰かある者が、このラリタヴィスタラなる法門が演説せられる時、耳を傾けて聴くならば、その者は八種の清淨心を獲得すべし。八種[の清淨心]とは何か。すなわち、一切の瞋恚を滅除するが故に、慈[心]を獲得すべし。一切の傷害を放棄するが故に、悲[心]を獲得すべし。一切の不快を除去するが故に、喜[心]を獲得すべし。貪愛と憎悪を放棄するが故に、捨[心]を獲得すべし。一切の色界<sup>359</sup>を自在に支配するが故に、四禪定を獲得すべし。心を自在に支配するが故に、四無色定<sup>360</sup>（無色界における四つの段階的境地）を獲得すべし。他の仏国土に往來するが故に、五神通<sup>361</sup>を獲得すべし。【また】首楞嚴三昧（勇行三昧）<sup>362</sup>を会得するが故に、あらゆる習氣（煩惱の潜在的余力）の相續を根絶することを得べし。これら八種の清淨心を獲得すべし。

<sup>350</sup> 上註347に同じ。

<sup>351</sup> 上註347に同じ。

<sup>352</sup> 「大功德」(mahāpunyatā) は、方広には「廣大福德」と訳されている。

<sup>353</sup> 「大」(mahā) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>354</sup> suyāma は夜摩天王の名である。

<sup>355</sup> saṃtuṣita は兜率天王の名である。

<sup>356</sup> sunirmita は化樂天王の名である。

<sup>357</sup> 上註347に同じ。

<sup>358</sup> 上註347に同じ。

<sup>359</sup> 「色界」(rūpadhātu) は、チベット訳には「欲界」(ḥdod paḥi khams) と訳されており、梵文と合わない。「四禪定」は「色界における四つの段階的境地。初禪から第四禪までである」(『佛教語大辞典』525頁参照) とされるので、文脈上、梵文が正しくチベット訳は誤訳であると思われる。

<sup>360</sup> 「四無色定」とは、低いほうから順に「空無辺処」「識無辺処」「無所有処」「非想非非想処」の四つの禪定をいう(『佛教語大辞典』533頁参照)。

<sup>361</sup> 「五神通」とは「天眼・天耳・他心・宿命・神足」の五通である。

<sup>362</sup> 「首楞嚴三昧」(śūraṅgama-samādhi) とは「けがれを摧破する勇猛な仏の三昧」であり、「健相・健行・一切事竟と漢訳する」(『佛教語大辞典』623頁「首楞嚴」参照)。



また<sup>363</sup>諸君、村落にせよ、都城にせよ、市街にせよ、国土にせよ、郷里にせよ<sup>364</sup>、経行処にせよ、  
精舎にせよ、このラリタヴィスタラなる法門が流布するところの方処、そこには、宿業の成熟を除  
いて、八種の怖畏を生じることなからん。八種〔の怖畏〕とは何か。すなわち、王による動乱の怖  
畏を生じることなからん。盗賊による動乱の怖畏を生じることなからん。猛獣による動乱の怖畏を  
478 生じることなからん。飢饉による動乱の怖畏を生じることなからん。互いの喧嘩・論争《・対  
立<sup>365</sup>》による動乱の怖畏を生じることなからん。天神による動乱の怖畏を生じることなからん<sup>366</sup>。竜  
による動乱の怖畏を生じることなからん。夜叉による<sup>367</sup>動乱の怖畏を生じることなからん。一切の  
災難による動乱の怖畏を生じることなからん。諸君、そこにおいては<sup>368</sup>、《宿業の成熟を除いて<sup>369</sup>》  
これら八種の怖畏を生じることなからん。

諸君、略説すれば、たとえ如来が一劫の永さの寿命を以て、昼夜に、休むことなく、この法門の  
讚辭を説こうとも、この法門の讚辭の終りに達することは決してなく、また、如来の弁才の尽きる  
ということもなかるべし。しかもまた、諸君、如来の持戒と三昧と智慧と解脱と解脱知見とが無量  
にして無辺なるが如く、まさにその如く、《諸君<sup>370</sup>》「かくの如く広大なる法を、如何にして、これ  
らの衆生は体得すべけんや」との、かかる考えを以て、この法門を受持し、保持し、読誦し、《書  
写し、<sup>371</sup>》〔他者に〕書写せしめ、通達し、普及せしめ<sup>372</sup>、また、大衆の中で詳細に解説するであろう  
ところの、その者たちの功德もまた無辺なるべし。

その時、実に世尊は、長老大迦葉と長老阿難と、また弥勒菩薩摩訶薩とに対して告げたり。「諸  
480 卿、私が無数の百千拘胝那由多もの劫をかけて完成したる、この無上正等菩提（阿耨多羅  
三藐三菩提）を汝らの手に譲渡す。最高の付嘱<sup>373</sup>を以て譲渡す。かくの如き<sup>374</sup>、この法門を、〔汝  
ら<sup>375</sup>〕自らもまた受持し、さらに、他の者たちにも詳細に解説せよ」〔と〕。

かくの如く告げたるのち、また<sup>376</sup>、世尊は、正にこの法門をなお一層よく付嘱するために、その  
時、かくの如き偈を説きたまえり。<sup>377</sup>

<sup>363</sup> 上註347に同じ。

<sup>364</sup> 「下巻」には「村邑にせよ、都城にせよ、聚落にせよ、郷里にせよ、郷国にせよ」と訳したが、原意を見直して、「村落に  
せよ、都城にせよ、市街にせよ、国土にせよ、郷里にせよ」に訂正する。

<sup>365</sup> 「対立」(vighraha) は東大主要写本には欠落しているが、チベット訳によれば挿入すべきである。なお、チベット訳は「互  
いの喧嘩・論争・対立・戦争による」という意味の訳文になっている。

<sup>366</sup> 方広の六番目は「離戦闘畏」であり、七番目（竜による動乱の怖畏）に該当する訳語は見当たらない。

<sup>367</sup> チベット訳は「夜叉等による」という意味の訳文になっている。なお、ミトラ校訂本では七番目と八番目を分けることな  
く「竜と夜叉による動乱の怖畏」(nāgayakṣasañkṣobhabhaya) としてまとめられている。このようにすれば全部で八種  
におさまるが、チベット訳では両者を分けているので、全部で九種になっている。

<sup>368</sup> チベット訳には「そこにおいては」(tatra) に当たる訳語はない。

<sup>369</sup> 〈 〉内の原文 (sthāpayitvā pūrvakarmavipākam) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳にはこれに対応する  
訳文がある。

<sup>370</sup> 「諸君」(mārṣā) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>371</sup> 「書写し」(likhiṣyanti) は東大主要写本には欠けているが、チベット訳によれば挿入すべきである。

<sup>372</sup> チベット訳では、四つの版本（北京版、ラサ版、ナルタン版、チョーネ版）に「普及せしめ」(hjug par byed pa) のみ  
があり、デルゲ版と Foucaux 校訂本には「通達し」(kun chub par byed pa) のみがある。

<sup>373</sup> 「付嘱」(parindanā) とは「經典を説いて与えた教えを後世に伝えるようにと付託すること」である。「下巻」には「ふしよ  
く」と振り仮名をつけたが、「ふぞく」に訂正する。

<sup>374</sup> チベット訳には「かくの如き」(evam) に当たる訳語はない。

<sup>375</sup> チベット訳のデルゲ版と Foucaux 校訂本には「汝ら」に相当する訳語 (khyed) がある。

<sup>376</sup> 「また」(ca) は、チベット訳には「その時」(dehi tshes) と訳されており、梵文と合わない。

<sup>377</sup> 以下に示される本経最後の10偈は、そのままの形で梵文「十地経」(Daśabhūmika-sūtra) にも見出される。外圍幸一

1. 仏眼を以て私が見るところの [あらゆる] 衆生,  
彼ら [の全て] が舍利弗<sup>しやりほつ</sup>の如き阿羅漢<sup>あらかん</sup>に成って,  
もしある者が, ガンジス河の砂 [の数] にも等しきほどの,  
拘胝<sup>こてい</sup>もの [多] 劫<sup>くわつ</sup>において, それら [の阿羅漢] を供養しようとも,
2. ある者が, 一昼夜<sup>いっしやう</sup>でも, 歓喜<sup>かんぎ</sup>を以て,  
[一人の] 独覚<sup>どっかく</sup>仏<sup>ぶつ</sup>を, 花環<sup>けわん</sup>や, また,  
他の優れた方法によって供養するならば,  
かれ (阿羅漢への供養) よりも, こちらの福德の果報<sup>まさ</sup>が勝れり。
3. たとえ一切の衆生<sup>えんがくしやうじや</sup>が縁覚<sup>えんがく</sup>の勝者<sup>しょうしや</sup> (独覚<sup>どっかく</sup>仏<sup>ぶつ</sup>)<sup>378</sup> に成って,  
彼ら [の全て] を, ある者が, ここに, 懈怠<sup>けたい</sup>あることなく,  
無数の劫にわたって, 臥具<sup>ふしぐ</sup>と食物<sup>じきじ</sup>と飲物<sup>いんぶつ</sup>と<sup>379</sup>,  
花と香と塗香<sup>ずこう</sup>とを以て供養しようとも,
4. ある者が, わずかに, ただ一人の如来<sup>にがた</sup>に対して,  
たとえ一度なりとも敬礼をなし,  
また, 浄心を以て「阿羅漢に帰命す」と唱えるならば,  
かれ (独覚<sup>どっかく</sup>仏<sup>ぶつ</sup>への供養) よりも, こちらの福德<sup>まさ</sup>がはるかに勝れり。
5. たとえ, 一切の衆生<sup>えんがくしやうじや</sup>が仏陀<sup>ぶつだ</sup>に成って,  
彼ら [の全て] を, ある者が, 先 (前述) と全く同様に<sup>380</sup>,  
天界の花や, はたまた, 人間界の逸品<sup>いつひん</sup>を以て,  
無数の劫にわたって, 多彩なる方法により供養しようとも,
6. ある者が, まさに正法<sup>しやうぽう</sup>の滅せんとする時に,  
自らの身体を, また, 生命をも捨てて,  
[わずか] 一日の間でも, この経典を保持するならば,  
その功德は, 実に, かれ (仏陀への供養) よりも勝<sup>まさ</sup>りたるべし。
7. 諸々の善導師<sup>ぜんどうし</sup> (如来) や独覚<sup>どっかく</sup>仏<sup>ぶつ</sup>を,  
また, 同じく, 諸々の声聞<sup>しやうもん</sup>を供養せんと願うところの,  
その者は, 堅固なる菩提心を起こして,  
この最勝なる経典を, 常に保持すべきなり。
8. 一切の如来<sup>にがた</sup>の顕現<sup>けんげん</sup>たるところの,  
これ [なる経典] は, 実に, あらゆる善説<sup>ぜんせつちやう</sup>中の王なり。  
この経典宝<sup>きやうてんぽう</sup>が存在するところの, その家には,  
実に, 常に如来が住する [も同然] なり。
9. また<sup>381</sup>, この経典を他の者たちに与え,

「Lalitavistara 囑累品の研究 (1) —— 「十地経」との対応部分を中心として——」(『印度学仏教学研究』第31巻第1号, 408-414頁) 参照。

<sup>378</sup> 「縁覚の勝者」(pratyayair jināh) は, 方広には「辟支仏」と訳されている。

<sup>379</sup> チベット訳は「食物と飲物と衣服と」という意味の訳文になっている。

<sup>380</sup> チベット訳は「同様に供養し」という意味の訳文になっている。

<sup>381</sup> チベット訳には「また」(ca) に当たる訳語はない。

484 わずか一句でも説くところの、その者は、拘<sup>コーティ</sup>胝もの劫にわたり、  
文字を亡失することも、意味を亡失することもなく、  
清浄にして無辺なる弁才を獲得すべし。

10. また、この法を聴くや、直ちに信<sup>しんぼう</sup>奉するところの、  
その者は、人民の導師中の最勝者にして<sup>382</sup>、  
彼に等しき衆生は一人として存在することなく、  
彼は、大海の如く、無<sup>むじん</sup>尽なる者に成るべし、と

世尊が、かくの如く説き〔終り〕たまうや、かの、大自在天子を上<sup>じょうしゅ</sup>首とする浄居天<sup>じょうくてん</sup>の天子たち、【また<sup>383</sup>】マイトレーヤ（弥勒）を上首とする一切の菩薩摩訶薩、また、大迦葉を上<sup>だいかしやう</sup>首とする一切の大  
声聞、<sup>384</sup>及び天神・人間・阿修羅<sup>アスラ</sup>・乾闥婆<sup>ガンダルヴァ</sup>を含む〔一切の〕世間は歡喜して、世尊の演説を讚歎せり、  
と<sup>385</sup>〔言われる〕。

〔以上〕「終結品<sup>386</sup>」と名づける第27章なり。

【一切の菩薩行を發願する<sup>387</sup>】《吉祥なる<sup>388</sup>》ラリタヴィスタラと名づける、  
大乘の經典は完了せり。

【因より生ずるところの諸法、実に、それらの因を如来は説きたまえり。  
また、それらの滅をも、同様に、大沙門は説きたまえり。<sup>389</sup>】

<sup>382</sup> チベット訳は「人民の導師（仏陀）を除きたる他には」という意味の訳文になっており、このほうが文脈上は適切かもしれない。

<sup>383</sup> 「また」(ca) は東大主要写本には欠けている。

<sup>384</sup> チベット訳には、この箇所には「また、長老アーナンダ（阿難）」に相当する訳文が挿入されており、方広にも「長老阿難」との訳語がある。

<sup>385</sup> チベット訳には「〜と」(iti) に当たる訳語はない。

<sup>386</sup> 方広には「屬累品」と訳され、普曜には「囑累品」と訳されている。梵語原文の nīgamana には「結論：総結」の意味があるので、ここでは「終結品（しゅうけつぽん）」と訳した。

<sup>387</sup> チベット訳には【 】内の部分に当たる訳文は見当たらない。

<sup>388</sup> 「吉祥なる」(śrī) は東大主要写本には見当たらないが、チベット訳には該当訳語 (hphags pa) がある。

<sup>389</sup> チベット訳には【 】内の部分に当たる訳文は見当たらない。その代わりに「インドの大師 jinamitra と dānaśīla と munivarma と、大校修訳官なる沙門 ye śes sde が翻訳し校正して、新しく開放された言葉によって造作し、刊行せり」というコロフォン（奥付）が付加されている。